一般国道359号道路改築改良事業に係る
埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告書

富山県　婦中町

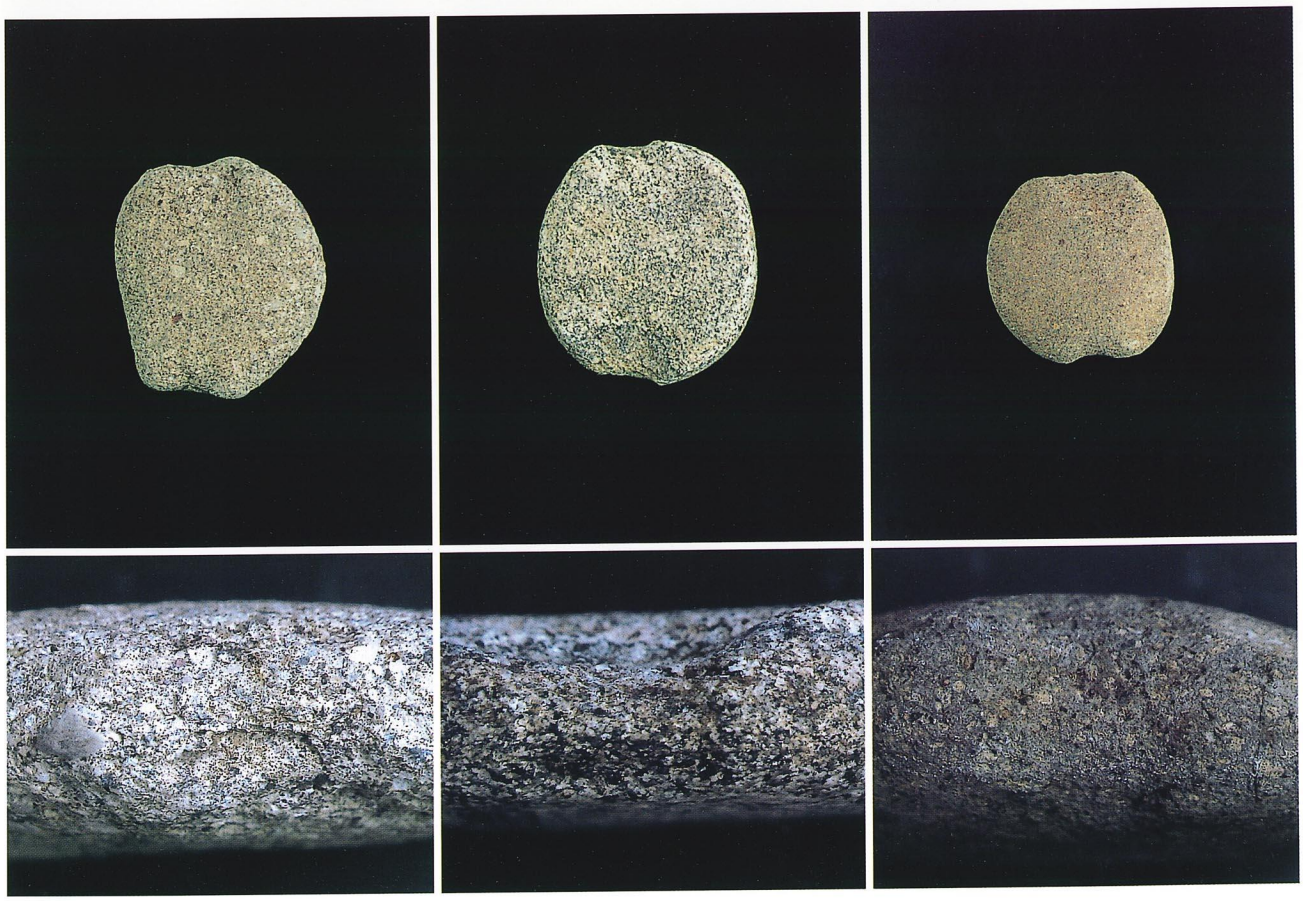
外輪野Ⅰ遺跡・鏡坂Ⅰ遺跡
発掘調査報告

２０００年２月

婦中町教育委員会

カラー図版 1

カラー図版 2



カラー図版 3

序

婦中町西側には富山県を縦断する呉羽丘陵に連なる丘陵が形成されています。この丘陵上は古くから県下でも有数の遺跡密集地帯であると知られています。この度、国道359号改築改良工事に先立ち調査を行った外輪野Ⅰ遺跡・鏡坂Ⅰ遺跡もこの丘陵上に位置しています。

調査の結果、縄文時代中期の竪穴住居跡・土坑等を検出し、それらに伴って、縄文土器、土偶、磨製石斧・石錘・凹石・敲石・黒曜石製石鏃等の石器等が出土しました。今回の発掘調査の結果で注目すべき点として、浅い窪地を利用した土器等廃棄場があります。そこから、縄文時代中期中葉の縄文土器が良好な状態で大量に出土しました。これは、その時期の県内の土器様相を知る上で重要な資料になると注目されます。また、祭祀に利用されたと思われる土偶やミニチュア土器等の遺物も出土しており、当時、それらを奉って祭祀が行われていたことが窺えます。

本書は、その調査結果をまとめたものです。本書が地域の方々の文化財に対する御理解と学術研究等の資料に御活用頂ければ幸いと存じます。

最後に、調査に御協力、御指導頂きました地元の方々、関係者の皆様に心から感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬ御支援を賜りますようお願い致します。

平成12年２月

婦中町教育委員会
教育長　宮島信一

例　　言

1　本書は富山県婦負郡婦中町外輪野地内に所在する外輪野Ⅰ遺跡および鏡坂Ⅰ遺跡の発掘調査報告である。

2　調査は一般国道 359号道路改築改良工事の実施に先立ち、富山県土木部富山土木事務所の依頼を受けて婦中町教育委員会が主体となって行った。調査の実施にあたっては、町教育委員会から委託を受けて山武考古学研究所が行った。

3　調査事務局は婦中町教育委員会生涯学習課に置き、文化振興係長山田茂信が調査事務を担当し、平成９～10年度を課長鍋山徹、平成11年度を課長見波重尋が総括した。

4　調査期間および面積は次の通りである。

外輪野Ⅰ遺跡	調査期間	平成９年度	平成９年７月１日～平成９年11月７日	調査面積	2,054㎡
鏡坂Ⅰ遺跡	調査期間	平成９年度	平成９年７月１日～平成10年７月10日	調査面積	4,579㎡
		平成10年度	平成10年６月10日～平成11年１月18日	調査面積	2,349㎡
整理調査	整理期間	平成11年度	平成11年３月１日～平成12年２月29日		

5　調査担当者は次の通りである。

試掘調査	平成８年度	調査担当	婦中町教育委員会	文化財保護主事	堀内大介　片岡英子
			富山県埋蔵文化財センター	文化財保護主事	高梨清志
本調査	平成９・10年度	調査担当	婦中町教育委員会	文化財保護主事	堀内大介　片岡英子
			山武考古学研究所	調査研究員	小村正之　有山径世
整理調査	平成１１年度	調査担当	婦中町教育委員会	文化財保護主事	堀内大介
			山武考古学研究所	調査研究室長	大賀　健
				調査研究員	小村正之　有山径世

6　本遺跡出土の土器については金沢美術工芸大学の小島俊彰教授にご教示を頂いた。

7　石製品の石材についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

8　本書の作成は、婦中町教育委員会の指導のもとに山武考古学研究所が行った。本文の執筆分担は、Ⅰ序章１．２を堀内大介、３を有山径世、Ⅱ外輪野Ⅰ遺跡・Ⅲ鏡坂Ⅰ遺跡については、１を小村正之、２．３．４（土器）．５を有山、４（石器）．５を大賀健が担当した。遺物の写真撮影については、土器・土製品を有山、石器を福山俊彰が担当した。

9　出土品および記録資料は、婦中町教育委員会が保管している。

10　調査期間中および資料整理期間中、下記の方々・諸機関からご教示・ご協力を頂いた。記して謝意を表したい。

（敬称略）

小島俊彰、源田　孝、清水克彦、篠原　正、婦中町シルバー人材センター、パリノ・サーヴェイ㈱

11　発掘調査・整理調査参加者は次の通りである。

本田秀吉・加藤和夫・丹波美秋・高田ミドリ・澤井輝雄・正橋かず子・山下房江・増井為吉・重松実・沢井義明・増山正信・小林律子・増井ともえ・高橋百合子・向島義一・五十嵐美雪・扇割カノエ・西境栄子・古井文子・水上カナイ・平野くに子・山中武子・野坂初枝・田中夏子・市川伸子・野上春枝・山藤ふさい・紋川昭市・増山和子・沢村進・石瀬幸枝・猪島エミ子・平野ユリ子・平野ゆかり・藤井陽子・木村春代・総領則子・麻生陽子・神野泉・佐藤洋子・赤星惇子・藤曲ひろこ・江頭宏枝・片岡美和子・伊藤順子・池田と志子・浅賀郁子・根本時子・濱松恵子・佐々木房子・松戸芳子・平岡亜也子

凡　　例

1　本文中に用いた地図は、『婦中町全図』１／20,000、『同』１／10,000、『婦中町図No.４』１／5,000、『婦中町No.４－１（外北）』『婦中町No.４－２（長沢）』１／2,500である。

2　挿図中に使用した方位は真北、水平基準は海抜高である。

3　挿図・写真図版の縮尺は、下記を基本として掲載した。

遺構配置図…１／400

基本土層模式図…１／40

遺構実測図　溝跡…１／80　住居跡・土坑・不明遺構…１／60

遺物実測図　土　器…復元実測図：１／４、断面実測図：１／３

土製品…１／２

石　器…２／３、１／３

写真図版　土器・土製品…１／３、１／２

石　器…１／１、１／２、１／３

4　調査および注記で使用した略称は以下の通りである。

外輪野Ⅰ遺跡……FSW-I　　穴・土坑……SK

鏡坂Ⅰ遺跡……FKS-I　　不明遺構……SX

竪穴住居跡……SI　　グリット出土……X000Y000

溝跡……SD　　平成９年５月30日出土……970530

例）鏡坂Ⅰ遺跡　D区　１号住居出土　No.1遺物　平成９年６月30日出土→FKS-ⅠD区SI01 No.1 970630

鏡坂Ⅰ遺跡　G区　X202Y260グリット　G-3層出土遺物　平成９年７月25日出土

→FKS-I G区X202Y260 G-Ⅲ970725

5　遺構・遺物番号は、本文・挿図・表・写真図版共に一致している。

6　土層説明及び遺物観察表の胎土に用いた色調名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』〔小山・竹原　1996〕による。

7　遺物実測図に使用したスクリーントーンは次のような意味を示す。

…土製品割れ口　　…石器みがき　　…石器摩滅

8　遺物観察表の計測値（　）は推定復元値を示す。

本 文 目 次

序　文
例　言
凡　例
目　次
Ⅰ　序章
1　位置と環境
(1)　位置と地理的環境 …… 1
(2)　歴史的環境と周辺の遺跡 …… 1
2　調査の経緯
(1)　調査に至る経緯 …… 4
(2)　試掘調査の結果 …… 4
3　調査の概要
(1)　発掘調査
①　調査方法 …… 6
②　調査経過 …… 7
(2)　整理作業 …… 8
Ⅱ　外輪野Ⅰ遺跡
1　概要 …… 9
2　地区設定と層序 ……10
3　遺構 ……10
4　遺物 ……11
5　まとめ ……12
参考文献
写真図版
Ⅲ　鏡坂Ⅰ遺跡
1　概要 ……17
2　地区設定と層序 ……17
3　遺構 ……25
4　遺物
(1)　土器 ……54
(2)　土製品 ……69
(3)　石器 ……146
5　まとめ ……190
註・参考文献
写真図版
報告書抄録

挿 図 目 次

Ⅰ　序章
第１図　周辺の遺跡分布図
第２図　試掘調査対象範囲
第３図　調査対象範囲及びグリット設定図

Ⅱ　外輪野Ⅰ遺跡
第４図　区割り図
第５図　基本土層模式図
第６図　出土遺物実測図
第７図　遺構配置図
第８図　ＳＤ０１
第９図　土坑図（１）
第10図　土坑図（２）

Ⅲ　鏡坂Ⅰ遺跡
第11図　区割り図
第12図　小グリット設定図
第13図　基本土層模式図
第14図　ＳＩ０３－２遺物接合状況図
第15図　遺構配置図（１）
第16図　遺構配置図（２）
第17図　遺構配置図（３）
第18図　ＳＩ０１
第19図　ＳＩ０２・０３
第20図　ＳＤ０１
第21図　土坑図（１）
第22図　土坑図（２）

第23図　土坑図（３）
第24図　土坑図（４）
第25図　土坑図（５）
第26図　遺物集中区土器出土状況平面図
第27図　遺物集中区土器出土状況断面図及び北壁土層図
第28図　遺物集中区及び包含層土器重量分布図
第29図　遺物集中区土器重量分布図
第30図　遺構出土土器（１）
第31図　遺構出土土器（２）
第32図　遺構出土土器（３）
第33図　遺構出土土器（４）
第34図　遺構出土土器（５）
第35図　遺構出土土器（６）
第36図　遺構出土土器（７）
第37図　遺物集中区出土土器（１）
第38図　遺物集中区出土土器（２）
第39図　遺物集中区出土土器（３）
第40図　遺物集中区出土土器（４）
第41図　遺物集中区出土土器（５）
第42図　遺物集中区出土土器（６）
第43図　遺物集中区出土土器（７）
第44図　遺物集中区出土土器（８）
第45図　遺物集中区出土土器（９）
第46図　遺物集中区出土土器（10）
第47図　遺物集中区出土土器（11）
第48図　遺物集中区出土土器（12）
第49図　遺物集中区出土土器（13）
第50図　遺物集中区出土土器（14）
第51図　遺物集中区出土土器（15）
第52図　遺物集中区出土土器（16）
第53図　遺物集中区出土土器（17）
第54図　遺物集中区出土土器（18）
第55図　遺物集中区出土土器（19）
第56図　遺物集中区出土土器（20）
第57図　遺物集中区出土土器（21）
第58図　遺物集中区出土土器（22）
第59図　遺物集中区出土土器（23）
第60図　遺物集中区出土土器（24）
第61図　遺物集中区出土土器（25）
第62図　遺物集中区出土土器（26）
第63図　遺物集中区出土土器（27）
第64図　遺物集中区出土土器（28）
第65図　遺物集中区出土土器（29）
第66図　遺物集中区出土土器（30）
第67図　遺物集中区出土土器（31）
第68図　遺物集中区出土土器（32）
第69図　遺物集中区出土土器（33）
第70図　遺物集中区出土土器（34）
第71図　遺物集中区出土土器（35）
第72図　遺物集中区出土土器（36）
第73図　遺物集中区出土土器（37）
第74図　遺物集中区出土土器（38）
第75図　遺物集中区出土土器（39）
第76図　遺物集中区出土土器（40）
第77図　遺物集中区出土土器（41）
第78図　遺物集中区出土土器（42）
第79図　遺物集中区出土土器（43）
第80図　遺物集中区出土土器（44）
第81図　遺物集中区出土土器（45）
第82図　遺物集中区出土土器（46）
第83図　包含層出土土器（１）
第84図　包含層出土土器（２）
第85図　不明遺構出土土器
第86図　土製品（１）
第87図　土製品（２）
第88図　剥片石器（１）
第89図　剥片石器（２）
第90図　打製石斧
第91図　磨製石斧（１）
第92図　磨製石斧（２）
第93図　磨製石斧（３）・不明磨製石器・石棒
第94図　石錘（１）
第95図　石錘（２）
第96図　石錘（３）
第97図　石錘（４）・砥石・石皿・線刻礫
第98図　凹石Ａ類

第99図　凹石Ｂ類
第100図　敲石・磨石Ａ類
第101図　磨石Ｂ類
第102図　扁平礫
第103図　台石

表　目　次

Ⅰ　序文
表１　遺跡一覧表
表２　試掘調査一覧表
Ⅲ　鏡坂Ⅰ遺跡
表３　土坑一覧表
表４　土器観察表（住居出土遺物）
表５　土器観察表（土坑出土遺物１）
表６　土器観察表（土坑出土遺物２）
表７　土器観察表（集中区出土遺物１）
表８　土器観察表（集中区出土遺物２）
表９　土器観察表（集中区出土遺物３）
表10　土器観察表（集中区出土遺物４）
表11　土器観察表（集中区出土遺物５）
表12　土器観察表（集中区出土遺物６）
表13　土器観察表（集中区出土遺物７）
表14　土器観察表（集中区出土遺物８）
表15　土器観察表（集中区出土遺物９）
表16　土器観察表（集中区出土遺物10）
表17　土器観察表（集中区出土遺物11）
表18　土器観察表（集中区出土遺物12）
表19　土器観察表（集中区出土遺物13）
表20　土器観察表（集中区出土遺物14）
表21　土器観察表（グリット出土遺物）
表22　土器観察表（不明遺構出土遺物）
表23　土製品観察表
表24　石材別石器分布グラフ
表25　石錘重量分布
表26　石錘長幅分布グラフ
表27　石材別石錘分布グラフ
表28　石器組成表
表29　石器観察表（剥片石器１）
表30　石器観察表（剥片石器２）
表31　石器観察表（打製石斧）
表32　石器観察表（磨製石斧１）
表33　石器観察表（磨製石斧２）
表34　石器観察表（不明磨製石器）
表35　石器観察表（石棒）
表36　石器観察表（石錘１）
表37　石器観察表（石錘２）
表38　石器観察表（石錘３）
表39　石器観察表（石錘４）
表40　石器観察表（石錘５）
表41　石器観察表（石錘６）
表42　石器観察表（石錘７）
表43　石器観察表（石錘８）
表44　石器観察表（石錘９）
表45　石器観察表（石錘10）
表46　石器観察表（石錘11）
表47　石器観察表（石錘12）
表48　石器観察表（石錘13）
表49　石器観察表（石錘14）
表50　石器観察表（砥石）
表51　石器観察表（石皿）
表52　石器観察表（線刻礫）
表53　石器観察表（凹石Ａ類１）
表54　石器観察表（凹石Ａ類２）
表55　石器観察表（凹石Ｂ類１）
表56　石器観察表（凹石Ｂ類２）
表57　石器観察表（敲石）
表58　石器観察表（磨石Ａ類）
表59　石器観察表（磨石Ｂ類１）
表60　石器観察表（磨石Ｂ類２）
表61　石器観察表（扁平礫）
表62　石器観察表（台石）

図 版 目 次

Ⅱ　外輪野Ⅰ遺跡

図版１　航空写真

図版２　遺跡遠景

図版３　遺構検出状況遠景

図版４　１．検出遺構全景　２．標準堆積土層　３．SD01断面B　４．SD01断面C　５．SK03断面　６．SK03全景

図版５　１．SK04断面　２．SK06断面　３．SK09断面　４．SK04全景　５．SK06全景　６．SK09全景　7. SK10断面
8．SK13断面　9．SK14断面　10. SK10全景　11. SK13全景　12. SK14全景　13. SK17断面
14. SK17全景　15. SK18全景

図版６　１．SK08断面　２．SK08全景　３．SK11断面　４．SK12断面　５．SK12全景　６．SK15全景　７．SK05断面
8．SK16断面　9．SK05全景　10. SK16全景　11. SX01遺物出土状況遠景　12. SX01遺物出土状況近景
13. SX01遺物出土状況近景　14. 作業風景

図版７　出土遺物

Ⅲ　鏡坂Ⅰ遺跡

図版８　遺跡遠景

図版９　１．A･B区遺構検出状況　２．C･D区遺構検出状況

図版10　１．F区遺構検出状況　２．F区遺構検出状況　３．G区遺構検出状況

図版11　１．H･I区遺構検出状況　２．J区遺構検出状況　３．K･L区遺構検出状況

図版12　１．D区南壁断面　２．G区南壁断面　３．G区北壁断面　４．H区セクション　５．I区セクション
6．K区北壁断面　7．L区西壁断面

図版13　１．SI01･SX02全景　２．SI01･SX02断面　３．SX02 遺物出土状況　４．SI01 遺物出土状況

図版14　１．SI02全景　２．SI03全景　３．SI02断面　４．SI02床下断面　５．SI02遺物出土状況(1)
6．SI02遺物出土状況(2)　7．SI02遺物出土状況(3)　8．SI03遺物出土状況

図版15　１．SK11遺物出土状況(1)　２．SK11遺物出土状況(2)　３．SK11全景　４．SK68～73全景
5．SK68遺物出土状況遠景(1)　6．SK68遺物出土状況遠景(2)　7．SK68断面　8．SK68遺物出土状況近景

図版16　１．SD01断面　２．SK02断面　３．SK02全景　４．SK05断面　５．SK102断面　６．SK104断面　７．SK05全景
8．SK102全景　9．SK104全景　10. SK01断面　11. SK04断面　12. SK06･07断面　13. SK01全景
14. SK03･04全景　15. SK06･07全景

図版17　１．SK08断面　２．SK09断面　３．SK12全景　４．SK08全景　５．SK09全景　６．SK15全景　７．SK13･14断面
8．SK43断面　9．SK44断面　10. SK13･14全景　11. SK43全景　12. SK44全景　13. SK45断面
14. SK46断面　15. SK46遺物出土状況

図版18　１．SK46全景　２．SK44～46全景　３．SK50全景　４．SK56全景　５．SK58･59全景　６．SK60～65全景
7．SK57遺物出土状況　8．SK57全景　9．SK66断面　10. SK74遺物出土状況　11. SK75断面
12. SK66全景　13. SK74全景　14. SK75全景

図版19　１．SK90断面　２．SK95断面　３．SK95全景　４．SK90遺物出土状況　５．SK101断面　６．SK101全景
7．SK90～94・96･100全景　8．SK103断面　9．SK105断面　10. SK103全景　11. SK105全景

12. SX09全景　13. SX09断面　14. SX10遺物出土状況　15. SX10遺物出土状況　16. SX10遺物出土状況

図版20　集中区遺物出土状況(1)　1. X202～207　Y259～260.5　2. X205.5～206　Y264.5
3. X201～201.5　Y254～254.5　4. X201　Y255　5. X204.5～206　Y258～259.5

図版21　集中区遺物出土状況(2)　1. X204～205.5　Y255～256.5　2. X208～209.5　Y265.5～267
3. X206.5～207　Y262～262.5　4. X205.5～206.5　Y261～261.5　5. X201.5　Y256.5
6. X202.5～203　Y258.5　7. X207.5　Y264　8. X205.5　Y255.5～256　9. X203.5　Y258.5～259

図版22　集中区遺物出土状況(3)　1. X204～206　Y261.5～263.5　2. X205.5～206　Y263　3. X204.5　Y263.5
4. X202～203　Y258～259　5. X203　Y259

図版23　集中区遺物出土状況(4)　1. X204～204.5　Y258～258.5　2. X205～205.5　Y258～258.5　3. X203.5　Y259
4. X204～204.5　Y256～256.5　5. X205.5～206　Y258～258.5

図版24　集中区遺物出土状況(5)　1. X206.5～207　Y259.5　2. X207.5～208　Y267.5　3. X203　Y252～252.5
4. X203.5～204　Y258.5　5. X202.5～203.5　Y259～259.5　6. X206　Y257

図版25　集中区遺物出土状況(6)　1. X203.5～207　Y258～259.5　2. X206.5　Y261.5
3. X205.5～206.5　Y259.5～261　4. X205.5　Y260.5　5. X202.5～203　Y258.5～259
6. X205.5～206.5　Y259～259.5

図版26　集中区遺物出土状況(7)　1. X203.5～204.5　Y258～259　2. X205～206　Y257～257.5（SK57上面）
3. X201～201.5　Y254～254.5　4. X204.5　Y259　5. X205　Y263.5　6. X206　Y263
7. X203.5　Y258.5　8. 作業風景

図版27　遺構出土土器（1/3）
図版28　遺構出土土器（1/3）
図版29　遺構出土土器（1/3）
図版30　遺構出土土器（1/3）
図版31　遺構出土土器（1/3）
図版32　遺構出土土器（1/3）
図版33　遺構出土土器（1/3）
図版34　遺物集中区出土土器（1/3）
図版35　遺物集中区出土土器（1/3）
図版36　遺物集中区出土土器（1/3）
図版37　遺物集中区出土土器（1/3）
図版38　遺物集中区出土土器（1/3）
図版39　遺物集中区出土土器（1/3）
図版40　遺物集中区出土土器（1/3）
図版41　遺物集中区出土土器（1/3）
図版42　遺物集中区出土土器（1/3）
図版43　遺物集中区出土土器（1/3）
図版44　遺物集中区出土土器（1/3）
図版45　遺物集中区出土土器（1/3）
図版46　遺物集中区出土土器（1/3）
図版47　遺物集中区出土土器（1/3）
図版48　遺物集中区出土土器（1/3）
図版49　遺物集中区出土土器（1/3）
図版50　遺物集中区出土土器（1/3）
図版51　遺物集中区出土土器（1/3）
図版52　遺物集中区出土土器（1/3）
図版53　遺物集中区出土土器（1/3）
図版54　遺物集中区出土土器（1/3）
図版55　遺物集中区出土土器（1/3）
図版56　遺物集中区出土土器（1/3）
図版57　遺物集中区出土土器（1/3）
図版58　遺物集中区出土土器（1/3）
図版59　遺物集中区出土土器（1/3）
図版60　遺物集中区出土土器（1/3）
図版61　遺物集中区出土土器（1/3）
図版62　遺物集中区出土土器（1/3）
図版63　遺物集中区出土土器（1/3）
図版64　遺物集中区出土土器（1/3）
図版65　遺物集中区出土土器（1/3）
図版66　遺物集中区出土土器（1/3）

図版67　遺物集中区出土土器（1/3）
図版68　遺物集中区出土土器（1/3）
図版69　遺物集中区出土土器（1/3）
図版70　遺物集中区出土土器（1/3）
図版71　遺物集中区出土土器（1/3、1/2）
図版72　包含層出土土器（1/3）
図版73　包含層及び不明遺構出土土器（1/3）
　　古代～近世の土器（1/3）
図版74　土製品（1/2）
図版75　土製品（1/2）
図版76　剥片石器（1/1）
図版77　剥片石器（1/1）、打製石斧（1/2）
図版78　打製石斧、磨製石斧（1/2）
図版79　磨製石斧、不明磨製石器、石棒（1/2）
図版80　石錘（1/2）
図版81　石錘（1/2）
図版82　石錘（1/2）
図版83　石錘（1/2）
図版84　石錘（1/2）
図版85　石錘（1/2）
図版86　石錘（1/2）
図版87　石錘（1/2）
図版88　石錘（1/2）
図版89　石錘（1/2）
図版90　石錘（1/2）
図版91　石錘（1/2）
図版92　石錘（1/2）
図版93　石錘（1/2）
図版94　石錘（1/2）
図版95　石錘（1/2）
図版96　石錘（1/2）
図版97　石錘（1/2）
図版98　石錘（1/2）
図版99　砥石、石皿、線刻礫、凹石Ａ類（1/3）
図版100　凹石Ａ類、凹石Ｂ類（1/3）
図版101　凹石Ｂ類（1/3）
図版102　敲石、磨石Ａ類、磨石Ｂ類（1/3）
図版103　磨石Ｂ類、扁平礫（1/3）
図版104　扁平礫、台石（1/3）
図版105　台石（1/3）

Ⅰ　序章

1　位置と環境

(1)　位置と地理的環境

婦中町は富山県のほぼ中央部にあり、北側・東側は県庁所在地の富山市と、西側は砺波市・小杉町と、南側は八尾町と隣接している。町の地形は概ね東側の平野部と西側の丘陵部に大別される。平野部は神通川とその支流である井田川が形成した扇状地が広がり、丘陵部は県中央を縦断している呉羽丘陵に連なる丘陵があり、山田川によって二分されている。

本書で報告する外輪野Ⅰ遺跡・鏡坂Ⅰ遺跡は婦中町外輪野地内に所在し、呉羽丘陵の南方に連なる丘陵の裾部にあり、山田川左岸に形成された河岸段丘上に位置する。標高は現地表面で76.3m～80.2mを測り、山田川河岸から比高約40mである。

(2)　歴史的環境と周辺の遺跡

婦中町の遺跡の分布は、西側の丘陵部に多くの遺跡が存在しており、旧石器時代から近世まで続く県内でも有数の遺跡密集地である。

旧石器時代は、河岸段丘に連なる独立丘陵上にある千坊山遺跡（第１図－21)、井田川左岸の河岸段丘上にある新開遺跡（同－36）・平岡遺跡（同－40）が知られている。

縄文時代になると遺跡数は一気に増え、本遺跡を含む外輪野地区をはじめ、平岡・富崎地区にまで広がる。外輪野地区では、山田川左岸の中位段丘面に縄文時代中期の集落遺跡である滝谷遺跡（同－44）・小滝谷遺跡（同－45)、鏡坂Ⅰ遺跡の北側に広がる鏡坂Ⅲ遺跡（同－４）がある。また、鏡坂Ⅰ遺跡では、1978（昭和53）年にほ場整備事業に先立ち試掘調査が行われている。その結果、中期の住居跡１棟が検出され、中期の土器や石器類が出土した。

弥生時代は、中期の集落跡である千里Ｃ遺跡（同－52）があり、末期頃には20棟以上の竪穴住居が確認された千坊山遺跡とその集落の墓と考えられる六治古塚（同－19）・向野塚（同－20)、千坊山遺跡南側の低位段丘面に広がる集落跡である鍛治町遺跡（同－６）とその集落の墓と考えられる鏡坂墳墓群（同－７)、高地性集落と思われる富崎赤坂遺跡（同－64）・離山砦遺跡（同－65）とその墓域と考えられる富崎城遺跡内の富崎墳墓群（同－68）等があり、末期頃に遺跡数が急増する。

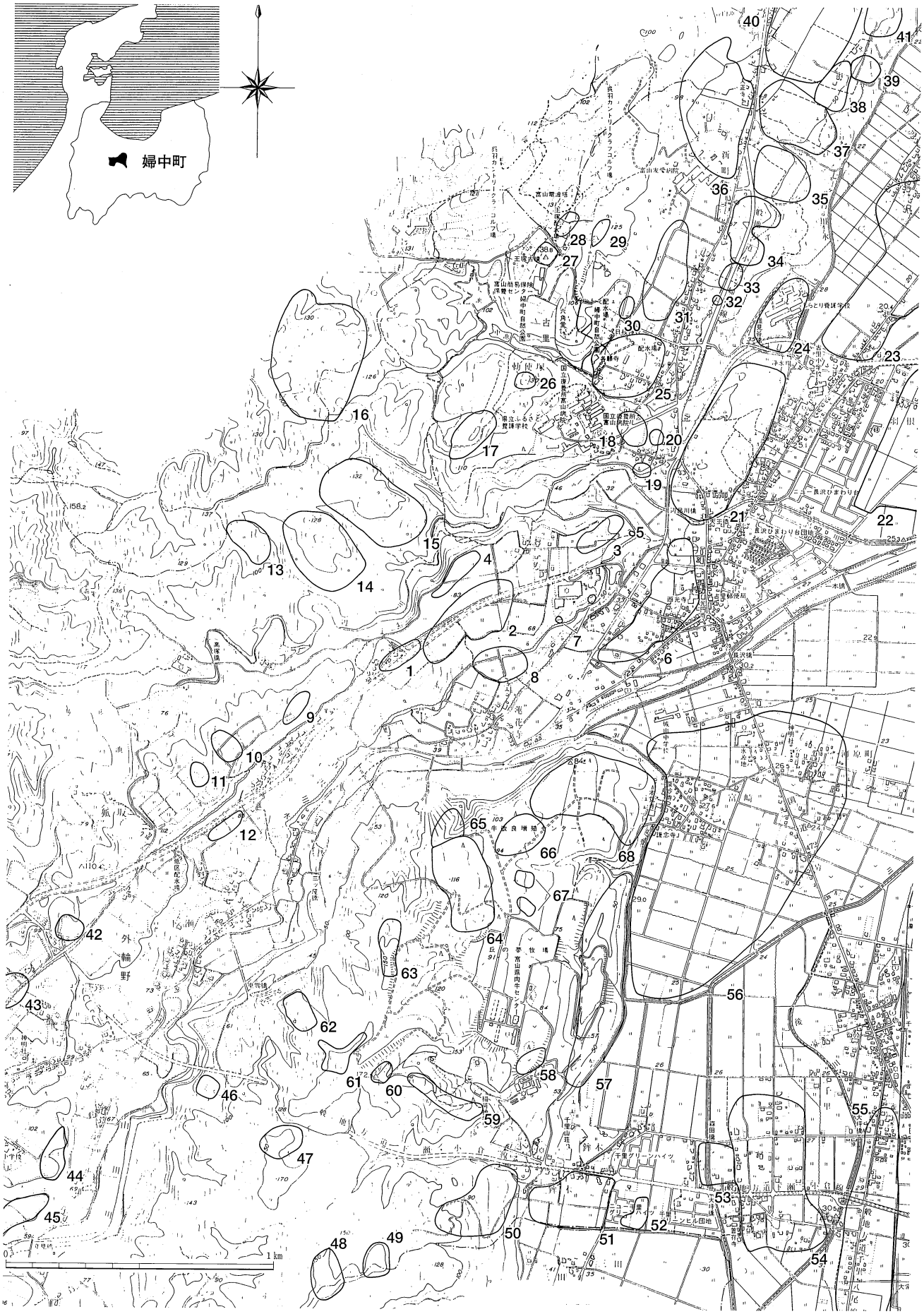
古墳時代は、３世紀末頃の勅使塚古墳（県指定史跡、同－26)、４世紀前半と考えられている王塚古墳（国指定史跡、同－27）がある。これらの古墳は井田川左岸の河岸段丘から羽根丘陵を経て呉羽丘陵に至る東側の平野部を見渡せる丘陵づたいに築造されている。

古代は、低位段丘面や平野部に遺跡が多く確認されている。これは低地の開発が進んだ結果によるものであろう。新町Ⅱ遺跡（同－31）は、羽根丘陵の東裾にあり、掘立柱建物跡３棟等が検出されている。建物の配置に計画性が窺われることから、当時の中核的性格を持つ集落の可能性が指摘されている。

中・近世になると、丘陵や台地から平野部に至るまで周知の遺跡が確認されている。本遺跡下の低位段丘面には、蓮花寺遺跡（同－８）がある。この遺跡は、1981年に町教育委員会で発掘調査を行った結果、14世紀前半から15世紀代にかけての遺跡であることが判明している。また、富崎丘陵や羽根丘陵には富崎城（同－68）や長沢城（同－14）等の多くの山城が築かれており、この周辺が砺波への交通の要所であったことが窺がえる。

以上、本遺跡周辺の周知の遺跡について概観してみたが、この辺りが県内でも有数の遺跡密集地であり、太古の昔から人々にとって生活のしやすい場所であったことが理解できる。

（堀内）



第１図　周辺の遺跡分布図（1/20,000）

表１　遺跡一覧表

No.	遺跡名称	種別	時代
1	外輪野Ⅰ遺跡	集落跡	縄文・中世・近世
2	鏡坂Ⅰ遺跡	集落跡	縄文（中期）・古代
3	鏡坂Ⅱ遺跡	散布地	中世
4	鏡坂Ⅲ遺跡	集落跡	縄文（中期）
5	雅楽介首塚	中世墓？	中世？
6	鍛冶町遺跡	集落跡	弥生・古墳・古代（奈良）・中世・近世
7	鏡坂墳墓群	方墳	不明
8	蓮花寺遺跡	寺院	中世（室町）
9	外北Ａ遺跡	散布地	不明
10	外北Ｂ遺跡	散布地	不明
11	外北Ｃ遺跡	散布地	不明
12	外北Ｄ遺跡	散布地	縄文
13	鐘突堂遺跡	山城・その他	中世
14	長沢城跡	山城	中世
15	家老屋敷城跡	山城	中世
16	菅谷城跡	城館	中世
17	五つ塚	古墳	古墳
18	古里保養園前遺跡	散布地	縄文・弥生？
19	六治古塚	四隅突出型墳丘墓	弥生
20	向野塚	方型墳丘墓	弥生
21	千坊山遺跡	集落跡・城館跡・塚状遺構・散布地	旧石器・縄文・弥生（末期）・古代・中世（鎌倉・室町）
22	下邑東遺跡	集落跡	古墳・古代（奈良・平安）
23	下邑遺跡	散布地	縄文・古代・中世・近世
24	添ノ山古墳群	古墳	古墳
25	各願寺前遺跡	集落跡・散布地	縄文・古代・中世（戦国）・近世
26	勅使塚古墳	古墳	古墳（初期）
27	王塚古墳	古墳	古墳（初期）
28	王塚古墳北遺跡	散布地	縄文
29	羽根北遺跡	散布地	不明
30	新町横穴墓	横穴	古墳？
31	新町Ⅱ遺跡	集落跡	縄文・古代（平安）・中世（鎌倉）・近世
32	新町大塚古墳	中世墓？	中世？
33	新町Ⅲ遺跡	散布地	古代
34	新町Ⅰ遺跡	散布地	古代
35	二本榎Ⅱ遺跡	散布地	縄文・古代・近世
36	新開遺跡	集落跡・基壇？	旧石器・中近世？
37	宮ノ高Ｂ遺跡	散布地	縄文・中世？
38	宮ノ高Ａ遺跡	散布地	縄文
39	小長沢古墳群	古墳	古墳
40	平岡遺跡	散布地	旧石器・縄文
41	小長沢Ⅰ遺跡	集落跡	古代・中世（戦国）
42	吉住遺跡	散布地	不明
43	中保屋遺跡	散布地	旧石器・縄文
44	滝谷遺跡	集落跡	縄文（中期）
45	小滝谷遺跡	集落跡	縄文（中期）
46	下瀬遺跡	散布地	不明
47	堀割砦	山城	中世
48	山田南砦	山城	中世
49	猿ヶ馬場砦	山城	中世
50	大館城跡	城館	中世
51	千里Ｆ遺跡	散布地	古代
52	千里Ｃ遺跡	散布地	弥生（中期）・古代
53	千里Ｂ遺跡	散布地	古代・中世・近世
54	千里Ｄ遺跡	散布地	古代・中世・近世
55	千里Ｅ遺跡	集落跡	古代・中世（鎌倉・室町）・近世
56	富崎遺跡	散布地	弥生・古墳・古代・中世・近世
57	富崎千里古墳群	古墳	古墳
58	千里片坂遺跡	散布地	不明
59	ゴダイ塚	その他	中世
60	森田山砦	山城	中世
61	赤坂砦	山城	中世
62	下瀬砦	山城	中世
63	下瀬向山遺跡	散布地	不明
64	富崎赤坂遺跡	散布地	弥生・中世
65	離山砦遺跡	集落跡・山城	弥生・中世
66	富崎城西遺跡	散布地	縄文
67	富崎南野遺跡	散布地	縄文・古代・中世
68	富崎城遺跡（富崎墳墓群含）	散布地・山城四隅突出型墳丘墓・方型墳丘墓	縄文・弥生（末期）・中世

2　調査の経緯

(1)　調査に至る経緯

国道359号線の事業区域は現道幅員が約７ｍと狭く、平面線形・断面線形が悪いことから、特に冬期において交通のネックとなっている。これを解消するため、平成４年度にバイパス整備を主体とした国道359号線（婦中西バイパス）改築改良事業が採択された。

そこで事業に先立ち婦中町教育委員会では、富山県埋蔵文化財センターの職員の派遣を受けて、平成５年12月に分布調査を行った結果、事業区域内に周知の埋蔵文化財包蔵地（鏡坂Ⅰ遺跡・鏡坂Ⅱ遺跡）の他に、２箇所の埋蔵文化財包蔵地（外輪野Ⅰ遺跡・外北Ｄ遺跡）を新たに発見した。事業主体である富山県富山土木事務所（以下、富山土木という）との事前協議の結果、法線の変更は困難なことから、平成８年８月から10月にかけて鏡坂Ⅰ遺跡10,000㎡、外輪野Ⅰ遺跡5,200㎡、外北Ｄ遺跡5,600㎡を、平成９年10月には鏡坂Ⅱ遺跡6,921㎡を対象に、試掘調査を行った。
調査の結果、鏡坂Ⅰ遺跡と外輪野Ⅰ遺跡で遺構・遺物が確認できた。

そのため、町教育委員会は再度富山土木と事前協議をもち、事業実施にあたり埋蔵文化財破壊の恐れのある現道下を除く区域8,982㎡（鏡坂Ⅰ遺跡6,928㎡、外輪野Ⅰ遺跡2,054㎡）を本調査対象とし、平成９年４月から富山土木の依頼を受けて本調査を行うこととした。

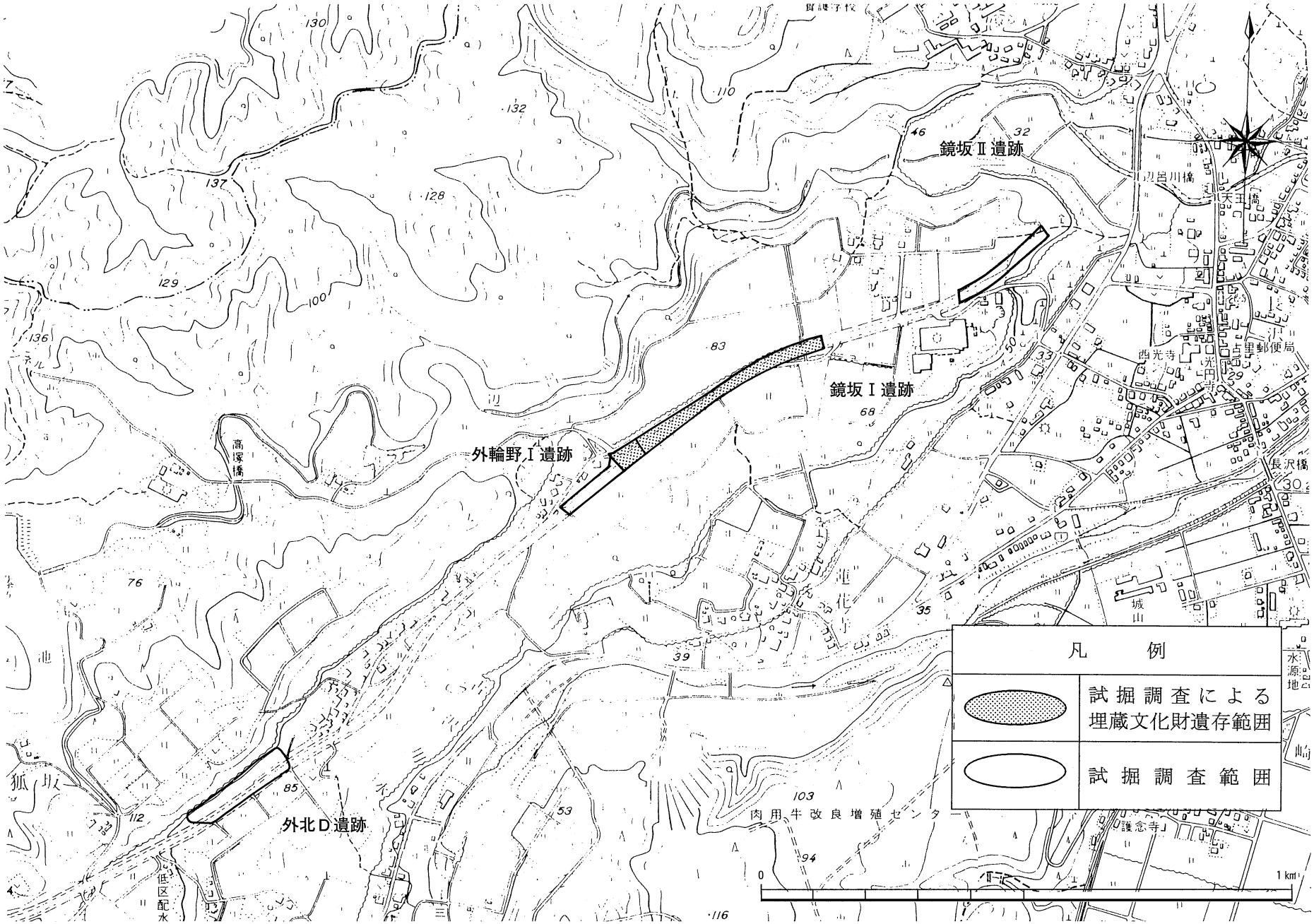
(2)　試掘調査の結果

平成８年８月から９月にかけて行った鏡坂Ⅰ遺跡・外輪野Ⅰ遺跡において、柱穴・土坑・溝の遺構を検出し、縄文土器・凹石・古代土師器・須恵器が出土した。特に、国道472号線を挟む調査区（本調査Ｇ区・Ｈ区・Ｉ区）において浅い窪地を確認し、その覆土から縄文時代中期の土器が大量に出土した。この窪地が土器廃棄場として利用されたと考え、周辺にその集落が広がっていると推測した。

また、外輪野地区を含む音川地区は、昭和50年代前半にほ場整備が行われており、試掘調査区ほぼ全域が削平されており、遺物包含層はほとんど確認できなかった。　　（堀内）

表２　試掘調査一覧表

試掘調査日	遺跡名称	調査参加者	検出遺構	出土遺物	試掘対象面積（㎡）	埋蔵文化財遺存面積（㎡）
平成８年８月	鏡坂Ⅰ遺跡	婦中町教育委員会 文化財保護主事　堀内大介 富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事　高梨清志	柱穴・土坑・溝	縄文土器・凹石・黒曜石剥片・古代土師器	10,000	6,927
平成８年９月	外北Ｄ遺跡	婦中町教育委員会 文化財保護主事　堀内大介 富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事　高梨清志	無	無	2,600	0
平成８年９月	外輪野Ⅰ遺跡	婦中町教育委員会 文化財保護主事　堀内大介 富山県埋蔵文化財センター 文化財保護主事　高梨清志	土坑・溝	須恵器	5,200	2,054
平成８年10月	外北Ｄ遺跡	婦中町教育委員会 文化財保護主事　片岡英子 堀内大介	無	無	3,000	0
平成９年10月	鏡坂Ⅱ遺跡	婦中町教育委員会 文化財保護主事　堀内大介	無	無	6,921	0



第２図　試掘調査対象範囲（1/10,000）

3　調査の概要

(1)発掘調査

①調査方法

グリットの設定（第３図）

座標軸は、国家座標第Ⅶ系を用い、X=71400・Y=－4700の点を０原点として設定した。Y軸が南北方向に向かうように設定し、それに対する東西方向をX軸とした。X軸は北方向に、Y軸は東方向に進むにつれて座標の数値は増える。グリットは、10m×10mの大グリットの間に、２m×２mの小グリットを設定した。また、グリットの表記は、X・Y座標の数値を用いた。

第３図　調査対象範囲及びグリッド設定図（1/5,000）

調査方法

表土除去は重機を使用して行った。但し、G区については表土直下から遺物が多量に出土するため、人力で除去した。除去後、人力で遺物包含層を掘り下げ、遺物の取り上げを行った後、遺構確認を行った。

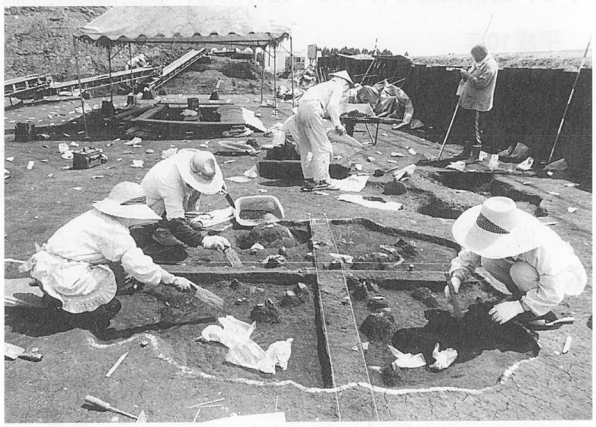
遺構は、一部遺物包含層中から確認できたものもあるが、ほとんどが覆土と遺物包含層との区別がつかなかったため、地山層で検出せざるを得なかった。遺構番号は、遺構の種類毎に遺跡別に通し番号を付した。遺構は基本的に半截して土層の観察を行ない、完掘後に写真撮影・実測を行った。

遺物の取り上げは、遺物包含層出土のものについては、層位別および2m×2mの小グリット別に取り上げ、随時レベルを測定した。内、G～I区については遺物出土数が多いため、G区は50㎝×50㎝、H・I区は1m×1mのメッシュを設定して取り上げた。遺構内のものについては、基本的に番号をつけ、レベルを測定して取り上げた。

空中撮影および全体測量は基本的に遺構完掘後、全体清掃をしてから行った。

実測図の縮尺は、遺跡全体図を200分の1、遺構配置図を100分の1とした。遺構平面・断面図および遺物出土状況図は20分の1を原則としたが、細部については10分の1で実測した。写真撮影は、35㎜白黒・カラーネガ（一部カラースライドを含む）および6×7白黒・カラーネガを用いて行った。また、空中撮影はラジコンヘリコプターを使用した。

表土除去状況


遺構掘り下げ作業状況

遺構実測作業状況

②調査経過

発掘調査は平成9年度（平成9年7月1日～平成10年7月10日）から平成10年度（平成10年6月10日～平成11年1月18日）にかけて行った。

外輪野I遺跡

調査期間は平成9年7月1日～同年11月7日である。

7月1日、発掘調査事務所を設営し、発掘機材の搬入を行った。上旬に重機による表土除去を行った。22日から発掘作業員が参加し、本格的な遺構調査に着手した。遺物包含層はC区に僅かしか存在しなかったため、直接ジョレンによる遺構確認を開始した。8月下旬に遺構確認を終了、9

終了確認検査状況

月上旬から遺構調査を開始した。10月中旬に遺構の掘り下げを終了し、全体清掃後に空中撮影及び遺跡全体測量を行った。11月７日を以て全ての調査を終了した。

鏡坂Ⅰ遺跡

調査期間は平成９年７月１日～平成11年１月18日までである。

平成９年

７月期中旬からＢ～Ｅ区の表土除去を開始し、除去が終了した地区から遺物包含層を掘り下げながら遺構確認を行った。９月は、外輪野Ⅰ遺跡の調査を先に終了させるため、一旦調査を中止した。10月にＥ区の遺構調査を行い、空中撮影を行った。下旬、Ａ区の表土除去を開始し、Ｂ～Ｄ区の遺構調査を開始した。11月中旬、Ａ区の表土除去を終了し、遺構調査を行った。12月上旬、Ｄ区東側残土置き場の表土除去を行った。

平成10年

１月、遺構調査を継続したが、根雪のため26日から現場作業を中断し、図面整理などの基礎整理を行った。２月23日から現場を再開した。27日からＧ区の表土除去を人力で開始した。３月はＦ区の調査を開始し、下旬にはＡ～Ｄ及びＦ区の調査を終了した。４月からＧ区の遺物包含層の掘り下げを開始し、遺物出土状況の写真撮影と実測を行った。尚、出土遺物については随時水洗いを行うこととした。また平成10年度の調査に先駆けて、Ｈ・Ⅰ区の周りに安全対策として矢板を打ち、水田の排水パイプを設置した。また、Ｇ区は水田に隣接し、調査区に水が入り水没するため、仮設電柱を立て、水中ポンプを稼働させた。６月10日より平成10年度の調査を開始した。上旬、Ｈ～Ｊ区の表土除去を開始した。また、Ｈ・Ⅰ区もＧ区同様に電気を引き水中ポンプを稼働させた。７月10日を以てＧ区並びに平成９年度の調査を終了した。また、Ｈ～Ｊ区の遺構調査を行った。８月中旬から、Ｋ・Ｌ南側区の表土除去を開始し、９月に遺構調査を行った。10月上旬にＨ・Ⅰ・Ｌ南側区の調査を終了した。下旬から11月上旬にかけてＬ区北側の調査行い、11月４日に現場調査を全て終了した。空中撮影はＡ～Ｄ区、Ｇ・Ｊ区、Ｈ・Ⅰ・Ｋ・Ｌ区の計３回実施した。５日から発掘調査事務所にて、遺物の水洗い・基礎整理を本格的に開始した。また上旬に、矢板及び電気撤去工事行った。12月中旬、遺物の水洗いを終了した。19日に発掘調査事務所の電気・ガス・水道撤去工事、21日に発掘機材・遺物を搬出し、22日、発掘調査事務所を解体した。

平成11年

基礎整理を終了し、１月18日を以て平成10年度の発掘調査を終了した。

(2)整理調査

遺物は、発掘調査期間中に洗浄まで完了し、その後千葉県成田市の山武考古学研究所本所に運び、調査を進めた。注記は、極めて細片で記載が不可能なものを除いてインクジェットプリンターを使用して行った。注記事項は、遺跡略号・出土地点・層位・日付等を併記した。土器の接合は、各遺構、グリット毎に分類して行った。尚、接合・修復作業にはセメダインＣ及びバイサム（樹脂系修復材）を用いている。また、同時に報告書掲載候補として遺物を選別し、接合終了後、写真撮影を行った。実測については、通常の手実測及び写真実測の双方を用いた。写真実測は 200㎜望遠レンズで撮影し、コンピューターによる画像処理を行った。縮尺は原寸を基本とし、文様展開の複雑なものについては展開実測も併用した。原寸の実測図を２分の１に縮小したものをロットリングを用いてトレースを行った。石器については、器種別に形態・技術・石質等の観察を行った。実測は原寸を基本とし、剥片石器については 1.3倍、その他の石器については３分の２に縮尺を変えてトレースした。版組は、基本的に実測図は２倍台紙、写真図版は等倍台紙を用いた。（有山）

Ⅱ　外輪野Ⅰ遺跡

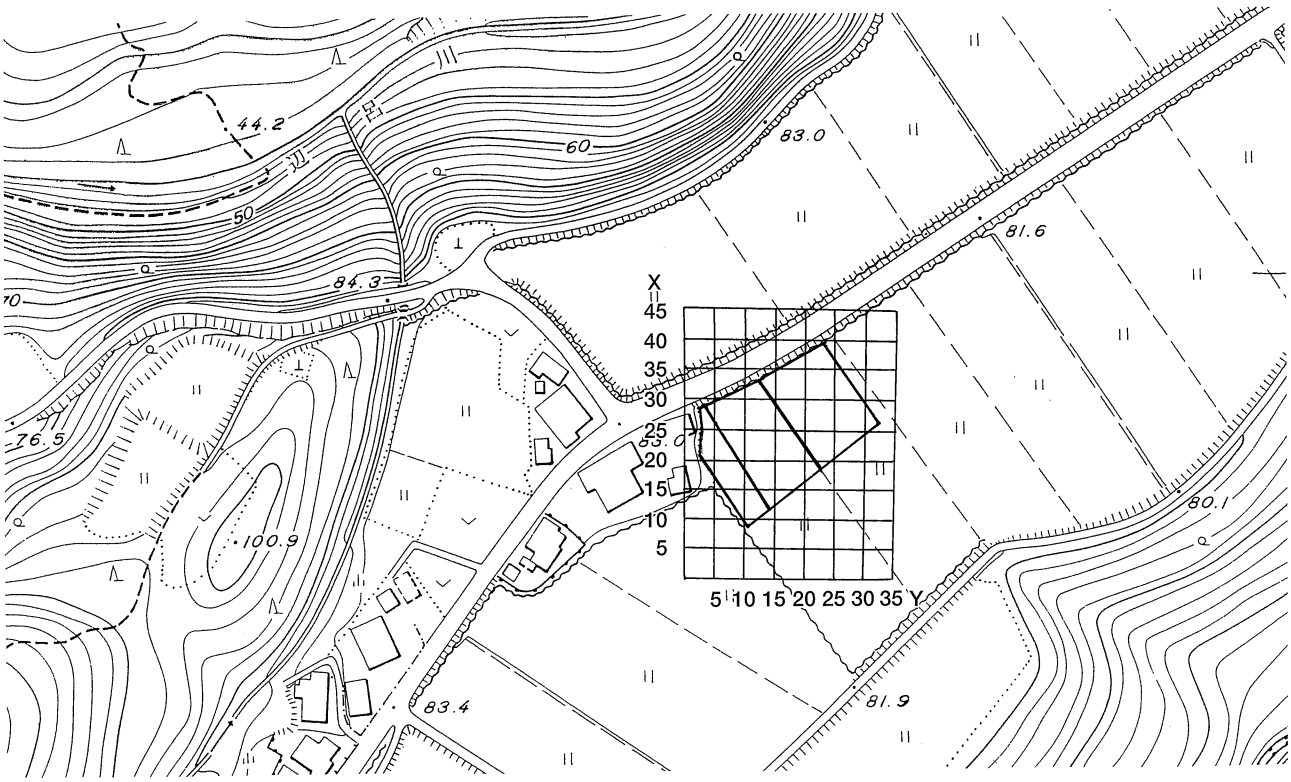
1　概要

外輪野Ⅰ遺跡は山田川左岸の中位河岸段丘面に所在する。標高はＡ区で81.5m、Ｃ区で81.2m である。南西から北東に向かって緩い傾斜をもつ地形上にあり、遺跡は広範な広がりを持っている。

遺跡は、今回の発掘調査以前の平成５年度には分布調査が、さらに平成８年度には北西部の調査が行われ、中世以降の所産と推定される掘立柱建物跡が２棟確認されている。また遺物では平成５年度の分布調査では中世土師器、平成８年度の調査では近世陶磁器、縄文土器片がそれぞれ出土している。そして、その成果として中世以降、本遺跡の周辺には砺波に抜ける旧道沿線に現在の集落に通ずる小集落が形成されていた可能性を推定している。

今回の調査区は平成８年度調査区域の東側に隣接する。検出された遺構は溝跡１条、土坑16基、その他小ピットと風倒木痕が多数であった。溝跡は、昭和50年代に行なわれた圃場整備時に開削された用水路と推測される。土坑は供伴遺物が無く時期不明であるが、南北方向に数列、直線的に並ぶ傾向が確認されている。さらに遺物では表採およびＡ区の溝跡から中・近世の陶磁器片、風倒木から縄文土器片と旧石器時代の石器が出土している。いずれも遺構に伴うものではなかった。

今回の発掘調査の成果は、平成５・８年度の調査において確認された中世から近世にかけての遺構が、さらに東側へと広がることを確認できたことに加え、旧石器時代の遺物の確認が追加されたことがあげられる。　　（小村）

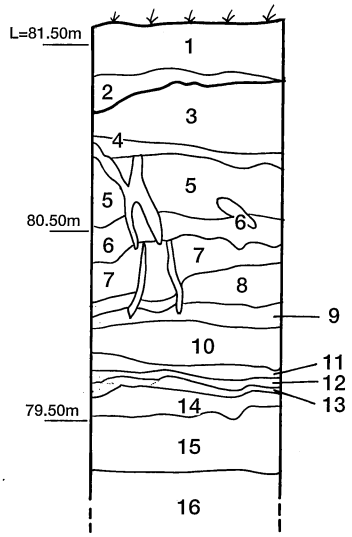


第４図　区割り図（1/2,500）

2　地区設定と層序

本遺跡は調査の便宜上、現場で地区割りを行った。区切りは水田に水を引くための塩化ビニールパイプとし、西側から順にＡ～Ｃ区と設定した。

基本層序は、１層：表土層、２層：攪乱層、３層以降：地山層に大別される。遺物包含層は確認されなかった。１層は、水田耕作土で、厚さは25～30㎝である。２層は、黒褐色粘質土層で、厚さは５～20㎝である。これは圃場整備の際の攪乱層で、Ｃ区のＹ=50 ラインより東側にのみ存在する。この部分を除けば、表土の下はすぐに地山となる。３層は、黄褐色粘質土層で、厚さは13～35㎝である。遺構確認はこの層で行った。地山層は、３～６層が粘質土層、７層がシルト層、８～12層が砂層、13層がシルト層、14層が砂層で、各々間にシルト層を挟んでいる。15層は砂質シルト層で、その下の16層で段丘礫層となる。



第５図　基本土層模式図（1/40）

外輪野Ⅰ遺跡　標準堆積土層　Ｃ区
＜表土＞
1．2.5Ｙ3/3暗オリーブ褐色土
＜攪乱層＞
2．5ＹR3/1黒褐色粘質シルト（7.5ＹＲ5/6明褐色土粒含）
＜地山層＞
3．10ＹR5/8黄褐色粘質土（10ＹR2/2黒褐色土粒含）
4．7.5ＹR5/8明褐色粘質土（@7.5ＹR2/1黒色土粒含）
5．7.5ＹR5/6明褐色粘質土（10ＹR4/2灰黄褐色土＋@粒含）
6．10ＹR5/8黄褐色粘質土
7．10ＹR5/4にぶい黄褐色シルト
8．10ＹR4/6褐色土細砂質土
9．10ＹR5/6黄褐色細砂質土
10．10ＹR5/4にぶい黄褐色砂質土
（10ＹR6/4にぶい黄橙色土＋5ＹR5/8明赤褐色土粒含）
11．7.5ＹR5/6明褐色砂質土（@粒含）
12．10ＹR5/8黄褐色砂質土（@粒含）
13．10ＹR5/4にぶい黄褐色シルト
14．10ＹR4/6褐色砂質土＋7.5ＹR5/8明褐色砂質土＋2.5ＹR4/6赤褐色砂質土
15．10ＹR5/8黄褐色砂質シルト

3　遺構

検出された遺構は、溝跡が１条、土坑が16基、不明遺構が１基である。その他に多数のピット、風倒木痕が確認された。なお、ＳＫ01・07は後から遺構ではないことが判明したため欠番とした。遺構に伴う遺物はなく、各遺構の帰属年代は不明である。

(1)溝跡

ＳＤ01（第８図）

幅は上場で 130㎝～150㎝、下場で30㎝～40㎝である。南西方向から北東方向に向かって、直線的に伸びている。遺構確認面からの掘り込みの深さは40㎝～60㎝である。断面形は薬研堀状を呈す。覆土は黒褐色土で、現在の水田の基盤面から一気に埋められている。Ａ区側［Ｘ20、Ｙ20］から近世の陶磁器片が２点出土したが、遺構に伴うかどうかは不明である。両端とも調査区外に伸び、北東方向は鏡坂Ⅰ遺跡のＳＤ01とほぼ直角に交わると思われる。昭和50年代に行われた圃場整備以前の用水路跡である可能性が高い。

(2)土坑（第９・10図）

掘り込みのしっかりした竪穴の土坑が大半を占めている。ＳＫ03・04・06・09・10・13・14・17・18の９基がこれに該当する。これらの土坑は、南北方向に直線的に並ぶ傾向を示し、南から、ＳＫ06・08・09・11・15、ＳＫ14・13、ＳＫ18・17と３列が確認できる。また、掘り込みや堆積状況についても幾つかの傾向が認められる。まず掘り込みについてであるが、掘り込みが１ｍ以上の深いものと、１ｍ未満のものに分けられる。１ｍ以上のものは、礫層上面で止めているものと、礫層を掘り込むものとがある。さらに堆積状況でも、上層まで一気に埋められたものと、半分程度まで人為的に埋めた後放置したものとに分けることができる。これらの土坑は、その形状や調査中に水が湧き出してきたこと等から、井戸のような役割を果たしたのではないかと考えられる。なお、掘り込みの深さや堆積状況、

配置に規則性は認められなかった。いずれも遺物を伴わないため時期は不明であるが、土層観察などから比較的新しいものと推測される。

1　掘り込みが１m以上の竪穴土坑

ＳＫ03は、遺構確認面で、長軸138㎝×短軸132㎝、深さ約140㎝の円形の土坑で、礫層を掘り込む。覆土は底面から約80㎝までが人為堆積、上層は自然堆積の状況を示す。下層は暗褐色土、上層は黒褐色土である。ＳＫ04は、長軸108㎝×短軸102㎝、深さ約100㎝の円形の土坑で、礫層を掘り込む。覆土は底面から約40㎝までは人為堆積、上層は自然堆積の状況を示す。下層は暗褐色土、上層は黒褐色土でともに炭化材粒子を含む。ＳＫ06は、長軸126㎝×短軸120㎝、深さ約130㎝の円形の土坑で、礫層を僅かに掘り込む。覆土は人為堆積の状況を示す。黒色土で、上層に炭化材粒子を含む。ＳＫ09は、長軸150㎝×短軸132㎝、深さ約170㎝の円形の土坑で、掘り込みは一部礫層上面に達する。覆土は底面から約120㎝が人為堆積、上面が自然堆積の状況を示す。下層は黒褐色土で炭化材粒子を含む。上層は黒色土。ＳＫ10は、長軸84㎝×短軸78㎝、深さ約125㎝の円形の土坑で、掘り込みは礫層上面に達する。覆土は底面から約90㎝までが人為堆積、上層が自然堆積の状況を示す。共に黒色土。ＳＫ13は、長軸150㎝×短軸120㎝、深さ約140㎝の楕円形の土坑で、礫層を掘り込む。覆土は人為堆積の状況を示し、黒褐色土で炭化材粒子を含む。ＳＫ14は、長軸108㎝×短軸102㎝、深さ約180㎝の円形の土坑で、礫層を掘り込む。覆土は人為堆積の状況を示し、黒色土である。ＳＫ17は、長軸138㎝×短軸132㎝、深さ約190㎝の円形の土坑で、掘り込みは礫層上面で止まる。覆土は人為堆積の状況を示し、黒色及び黒褐色土でしまりは弱い。ＳＫ18は、長軸150㎝×短軸110㎝、深さ約170㎝の楕円形の土坑で、掘り込みは礫層上面に達する。覆土は不明である。

2　掘り込みが１m未満の竪穴土坑

ＳＫ08は、長軸102㎝×短軸90㎝、深さ約90㎝の円形の土坑である。覆土は人為堆積の状況を示し、下層が黒色土、上層が黒褐色土で、炭化材粒子を含む。ＳＫ11は、長軸102㎝×短軸90㎝、深さ約70㎝の円形の土坑である。ＳＫ12は、長軸210㎝×短軸186㎝、深さ約100㎝の円形の土坑で、掘り込みは一部礫層上面に達する。覆土は人為堆積の状況を示す。底面から約30㎝まではにぶい黄橙色土で、他の土坑と状況を多少異にする。上面は黒褐色土で一部に炭化材粒子を含む。ＳＫ15は、長軸110㎝×短軸80㎝、深さ約70㎝の楕円形の土坑で、礫層を僅かに掘り込む。

3　その他の土坑

ＳＫ02は、長軸90㎝×短軸84㎝、深さ約５㎝の円形の土坑である。ＳＫ05は、長軸160㎝×短軸120㎝、深さ約25㎝の楕円形の土坑で掘り込みは礫層上面に達する。覆土は暗褐色土で炭化材粒子を含む。ＳＫ16は、長軸380㎝×短軸100㎝、深さ約50㎝の瓢箪形の土坑で、掘り込みは礫層上面に達する。覆土は人為堆積の状況を示し、焼土・炭化材を多く含む。また、瓢箪形の括れの部分から長さ20～30㎝程の被熱礫が出土した。各土坑の帰属年代は不明である。

(3)不明遺構

ＳＸ01

Ａ区で検出された。長軸830㎝×短軸180㎝、深さ約70㎝の風倒木痕である。覆土は黒褐色土が主で、一部に炭化材粒子を含む。覆土から旧石器時代の彫器が１点、縄文時代中期前葉と後葉の土器片が計28点出土した。流れ込んだもので遺構には伴わず、風倒木痕自体の時期は不明である。

4　遺物

出土した遺物は、風倒木痕であるＳＸ01から旧石器時代の石器１点、縄文時代の土器片28点、陶磁器片が表採で２点、ＳＤ01から２点の計４点である。全て遺構に伴う遺物ではなく、後から流れ込んだものと考えられる。

(1)旧石器時代（第６図１、図版７の１）

ＳＸ01の風倒木痕から出土した。デイサイトの縦長薄片を素材とする彫器である。長さ4.7㎝、幅2.8㎝、厚さ0.6㎝。素材の打点を除去するように細かな調整剥離を加えた後、彫刀面作出の為の斜方向からの打撃を行っている。使用痕は明瞭ではない。側縁は未調整であるが、右側縁の外端部に微細な剥離が観察される。遺物の形状より旧石器時代の彫器と判断したが、明瞭ではない。

(2)縄文時代（第６図２～４、図版７の２～４）

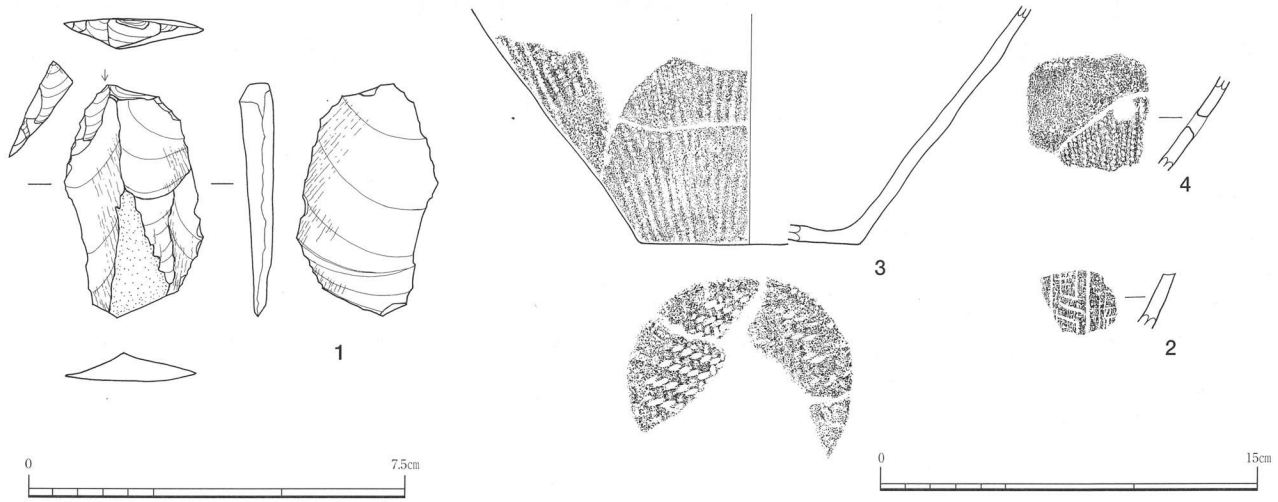
ＳＸ01から出土した。２は深鉢形土器の胴部破片である。格子目文を持ち、中期前葉に比定されると思われる。橙色を呈し、胎土は長石と石英を含む。３・４は同一個体である。平底の深鉢形土器。ＲＬの縄文が縦位に施文されており、中期後葉の串田新式に比定されると思われる。摩耗がひどく、内面に煤が付着する。底部には、一本越え、一本潜り、一本送りの網代痕が確認された。黄橙色を呈し、胎土は、長石・石英・雲母を含む。

5　まとめ

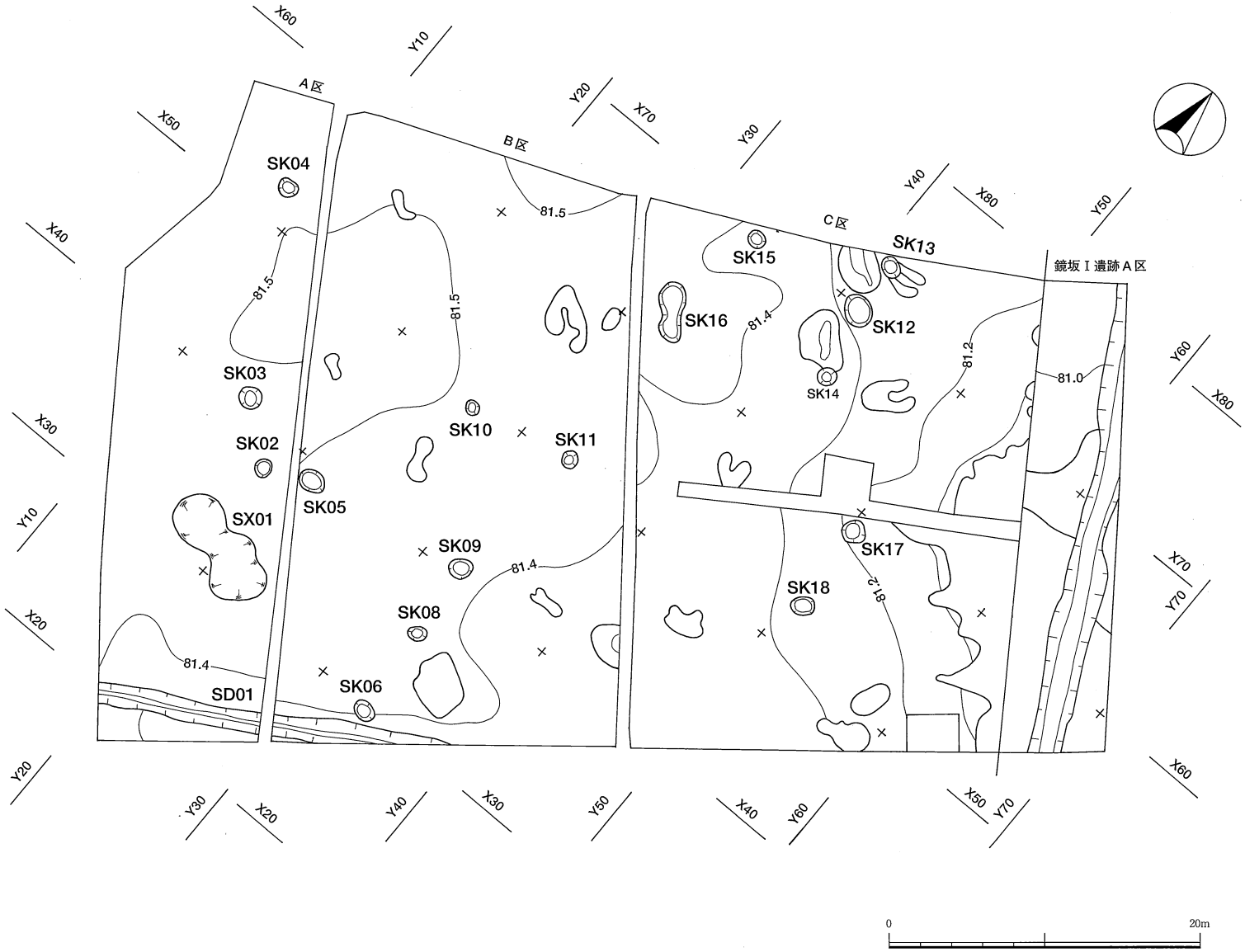
今回の調査では、溝跡１条と土坑16基が検出された。遺構に伴う遺物がないため、その性格や帰属年代は定かではない。前年度の調査では、中世後半以降のものと推定される掘立柱建物が２棟検出されているため、今回検出された遺構も、これらと同時代の可能性がある。また、遺物は、ＳＸ01の風倒木痕から旧石器時代の彫器と縄文時代中期前葉と後葉の深鉢形土器が出土した。尚、縄文土器については、本遺跡は北東で縄文時代の遺跡である鏡坂Ⅰ遺跡と接するため、そこから流れ込んだ可能性が高い。（有山）

参考文献

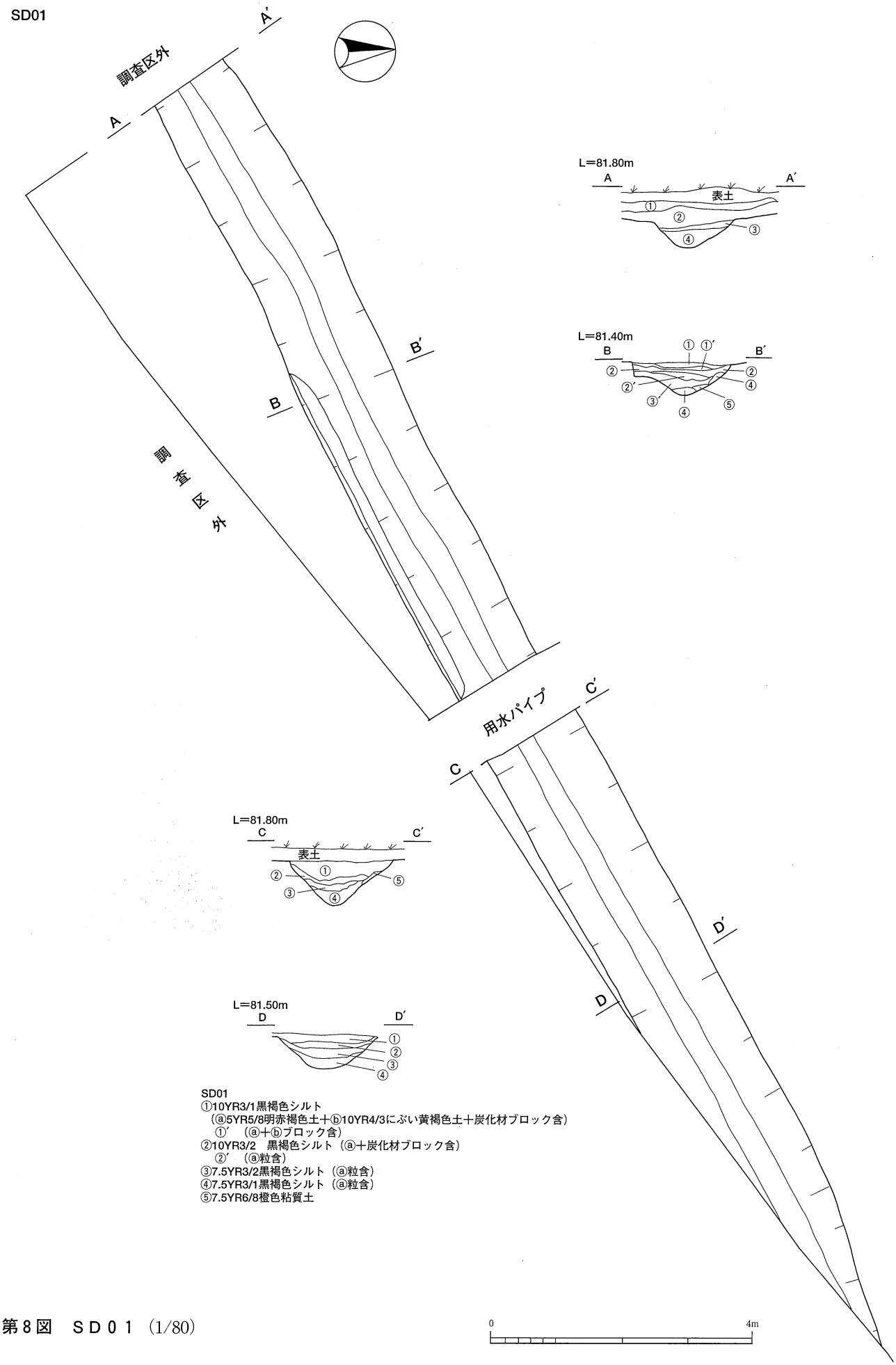
婦中町教育委員会　1984『蓮花寺遺跡の調査－富山県婦中町蓮花寺所在の中世遺跡調査報告』
婦中町教育委員会　1995『富山県婦中町中名Ⅱ遺跡発掘調査報告』
婦中町教育委員会　1997『富山県婦中町外輪野Ⅰ遺跡発掘調査報告』
婦中町　1967『婦中町史』



第６図　出土遺物実測図（１：2/3、２～４：1/3）

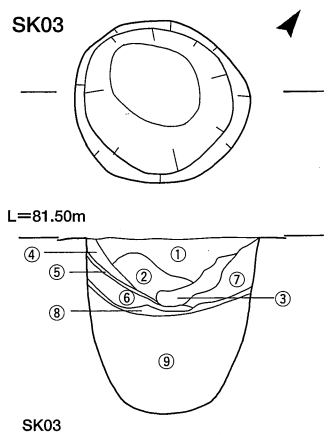


第７図　遺構配置図（1/400）

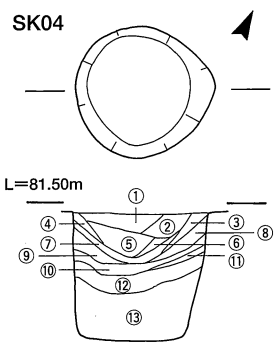


SD01
①10YR3/1黒褐色シルト
（ⓐ5YR5/8明赤褐色土＋ⓑ10YR4/3にぶい黄褐色土＋炭化材ブロック含）
①′（ⓐ＋ⓑブロック含）
②10YR3/2　黒褐色シルト（ⓐ＋炭化材ブロック含）
②′（ⓐ粒含）
③7.5YR3/2黒褐色シルト（ⓐ粒含）
④7.5YR3/1黒褐色シルト（ⓐ粒含）
⑤7.5YR6/8橙色粘質土

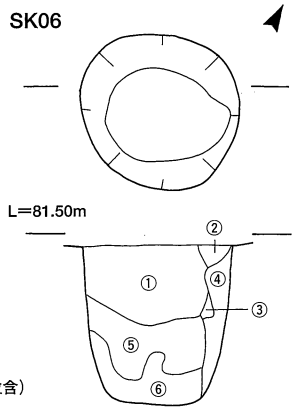
第８図　ＳＤ０１（1/80）



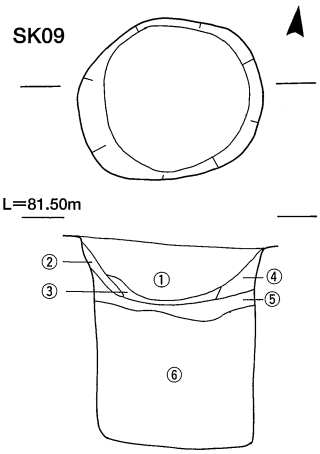
SK03
①10YR3/1黒褐色シルト（ⓐ7.5YR6/8粒含）
②7.5YR3/1黒褐色シルト（ⓐ粒含）
③【①】（ⓐブロック含）
④7.5YR5/6明褐色シルト（ⓐ粒含）
⑤2.5YR4/6赤褐色シルト＋【⑧】（ⓐ粒含）
⑥7.5YR6/6橙色シルト＋【⑧】（ⓐ粒含）
⑦10YR3/2黒褐色シルト＋ⓑ2.5YR4/6赤褐色シルト（ⓐ粒含）
⑧2.5YR2/1赤黒色シルト（ⓑ粒含）
⑨10YR3/3暗褐色シルト（ⓐ＋⑧粒含）



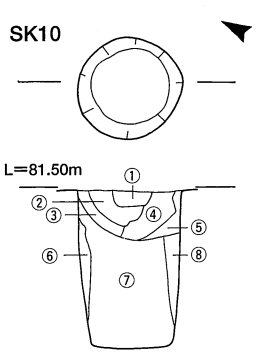
SK04
①7.5YR3/1黒褐色シルト
（ⓐ10YR5/4 にぶい黄褐色土＋ⓑ7.5YR5/6明褐色土＋Ⓒ炭化材粒含）
②7.5YR3/2黒褐色シルト（ⓐ＋ⓑ＋Ⓒ）
③10YR3/2黒褐色シルト（ⓑ＋Ⓒ）
④10YR4/6褐色シルト（Ⓒ）
⑤7.5YR2/1黒色シルト（ⓐ＋ⓑ＋Ⓒ）
⑥10YR2/2黒褐色シルト（ⓑ）
⑦10YR2/1黒色土（ⓑ＋Ⓒ多含）
⑧7.5YR3/2黒褐色シルト（ⓑ＋Ⓒ）
⑨7.5YR5/6明褐色シルト（ⓑ＋Ⓒ）
⑩7.5YR2/2黒褐色シルト（ⓑ）
⑪10YR4/6褐色シルト（ⓑ）
⑫10YR3/2黒褐色シルト＋7.5YR4/6褐色シルト（ⓐ＋ⓑ＋Ⓒ）
⑬10YR3/3暗褐色シルト（ⓑ）



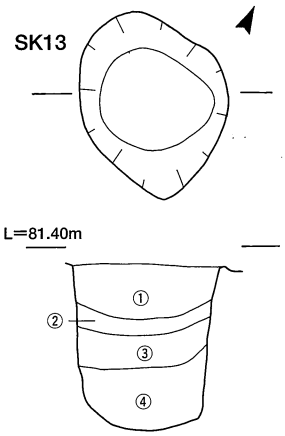
SK06
①10YR2/1黒色シルト
（5YR6/8橙色土＋10YR5/1褐灰色土＋炭化材粒含）
②【①】＋【④】＝3：1
③【①】＋【⑤】＝1：1
④7.5YR6/8橙色シルト
⑤10YR3/4暗褐色シルト
⑥10YR4/2灰黄褐色シルト



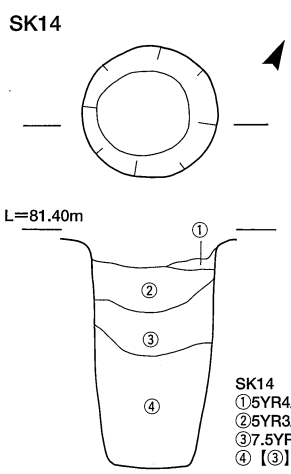
SK09
①10YR1.7/1黒色シルト
（ⓐ7.5YR5/6明褐色土粒含）
②10YR2/2黒褐色シルト（ⓐ）
③7.5YR2/1黒色シルト
④10YR2/2黒褐色シルト（ⓐ＋ⓑ炭化材粒含）
⑤7.5YR3/1黒褐色シルト（ⓐ＋ⓑ）
⑥7.5YR2/2黒褐色シルト
（ⓐ＋ⓑ＋10YR5/8黄褐色土ブロック含）



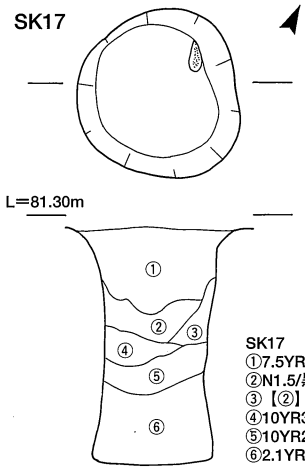
SK10
①7.5YR3/1黒褐色シルト
②10YR1.7/1黒色シルト
③10YR2/1黒色シルト
④【①】＋【⑦】＝1：1
⑤【⑦】：7.5YR5/6明褐色シルト＝3：1
⑥【⑦】：10YR4/6褐色シルト＝3：1
⑦7.5YR2/1黒色シルト
⑧【⑦】：褐色シルト＝2：1



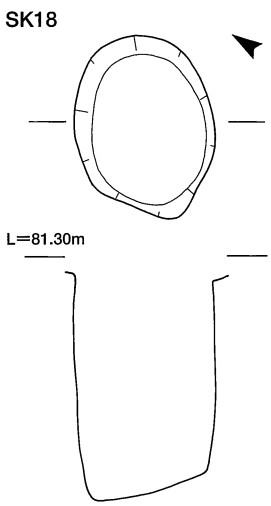
SK13
①7.5YR3/1黒褐色シルト
（ⓐ7.5YR5/8明褐色土＋ⓐ10YR4/2灰黄褐色土＋Ⓒ炭化材粒含）
②10YR3/1黒褐色シルト
（ⓐ＋ⓑ＋ⓒ）
③10YR3/2黒褐色シルト（ⓐ）
④7.5YR3/2黒褐色シルト（ⓐ）

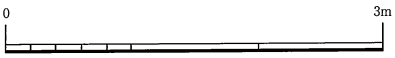


SK14
①5YR4/2灰褐色シルト
②5YR3/1黒褐色シルト
③7.5YR1.7/1黒色シルト
④【③】（黄褐色ブロック含）



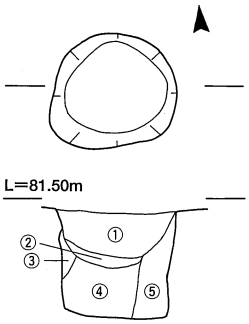
SK17
①7.5YR1.7/1黒色シルト
②N1.5/黒色シルト
③【②】（黄褐色ブロック多含）
④10YR3/1黒褐色シルト
⑤10YR2/1黒色シルト
⑥2.1YR3/1黒褐色シルト





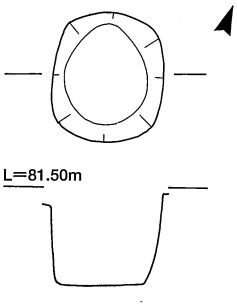
第９図　土坑図(1)（1/60）

SK08

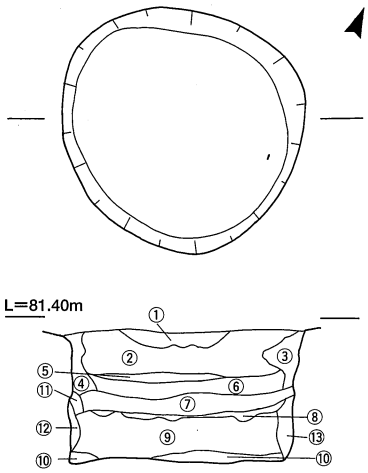


SK08
①10YR3/1黒褐色シルト
（ⓐ7.5YR5/8明褐色土＋ⓑ炭化材粒含）
②10YR2/1黒色シルト（ⓐ＋ⓑ）
③【④】＋ⓒ7.5YR6/8橙色シルト
④7.5YR2/1黒色シルト（ⓐ＋ⓑ）
⑤【④】（ⓐ＋ⓒ）

SK11

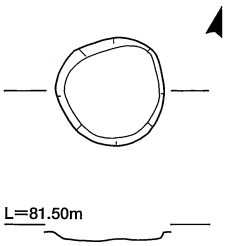


SK12

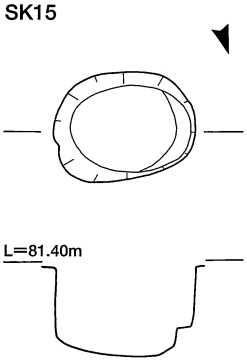


SK12
①7.5YR2/2黒褐色シルト
②7.5YR3/1黒褐色シルト
（ⓐ7.5YR5/8明褐色土粒含）
③【②】＋7.5YR6/6橙色シルト
④7.5YR3/2黒褐色シルト（ⓐ）
⑤10YR3/1黒褐色シルト（ⓐ）
⑥10YR2/1黒色シルト（ⓐ）
⑦5YR3/1黒褐色シルト
（ⓐ＋ⓑ7.5YR6/4にぶい橙色土
＋10YR1.7/1黒色土＋炭化材ブロック含）
⑧7.5YR2/1黒色シルト（ⓐ＋ⓑ）
⑨10YR5/3にぶい黄橙色シルト＋ⓐ
⑩10YR5/4にぶい黄橙色シルト＋ⓐ
⑪7.5YR5/6明褐色シルト
⑫【⑨】＋7.5YR3/1黒褐色シルト
⑬【⑪】（7.5YR3/1黒褐色土粒含）

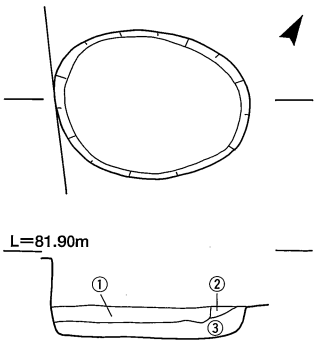
SK02



SK15

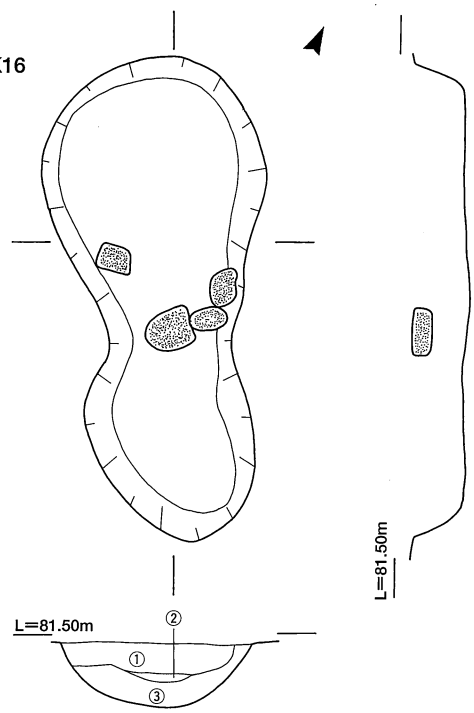


SK05



SK05
①10YR3/3暗褐色シルト
（ⓐ5YR4/8赤褐色土＋ⓑ7.5YR5/6明褐色土＋ⓒ炭化材ブロック含）
②7.5YR4/4褐色シルト（ⓑ＋ⓒ）
③10YR3/4暗褐色シルト（ⓐ＋ⓑ＋ⓒ＋礫粒含）

SK16



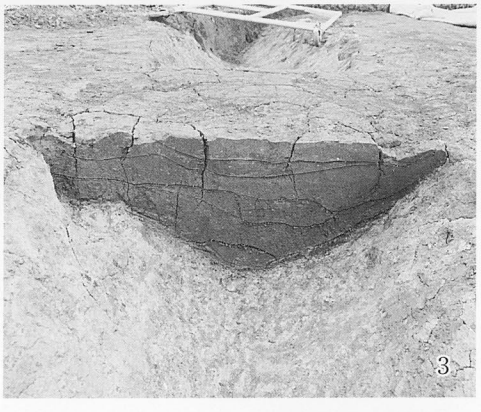
SK16
①10YR3/2暗褐色シルト＋10YR5/4にぶい黄褐色シルト
（ⓐ5YR4/8赤褐色土＋炭化材＋礫ブロック含）
②【①】（ⓐ粒含）
③5YR4/8赤褐色砂質土

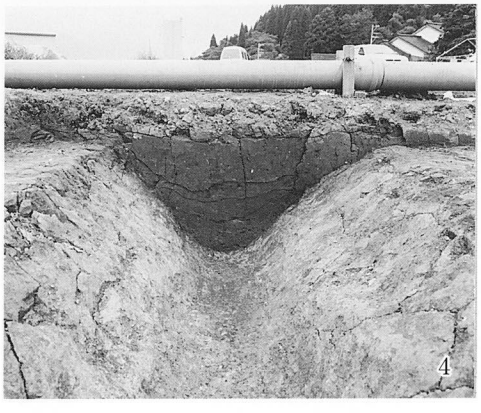
第10図　土坑図(2)（1/60）

図版 1
航空写真　昭和36年国土地理院撮影（1/10,000）

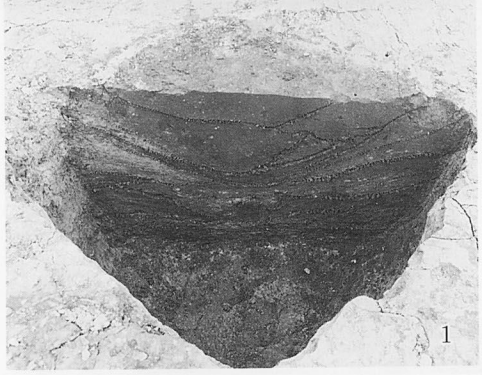
図版 2　遺跡遠景（南西から）

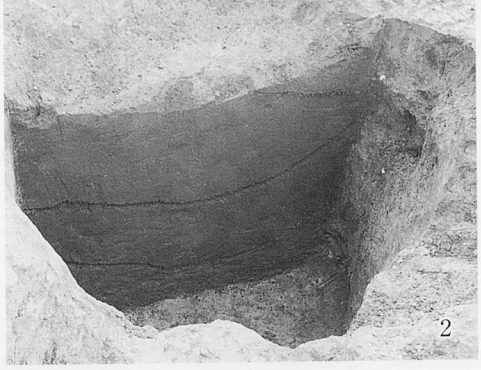
図版 3　遺構検出状況遠景

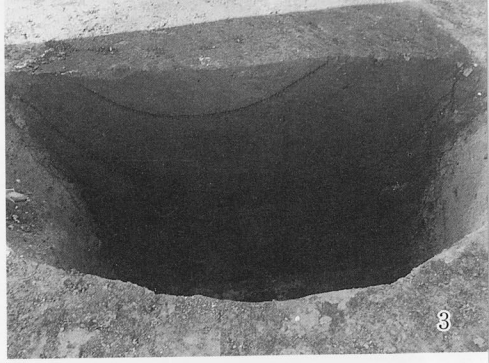


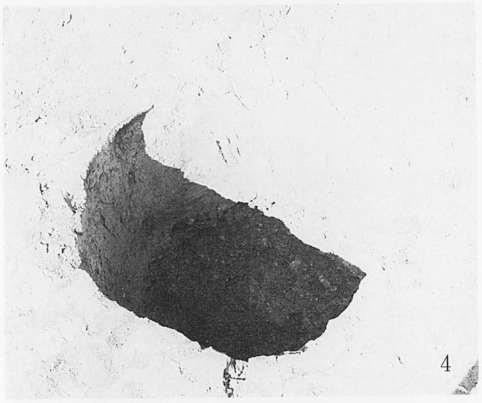


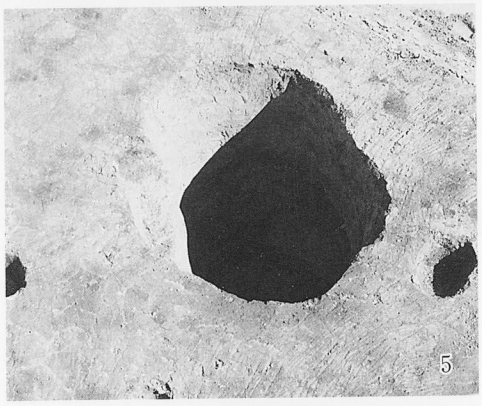
図版 4　1．検出遺構全景　2．標準堆積土層（C区）　3．SD01断面B
4．SD01断面C　5．SK03断面　6．SK03全景

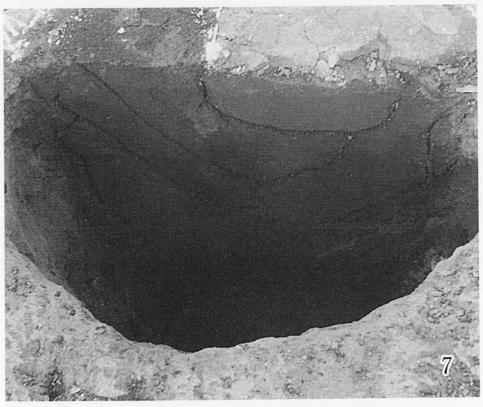


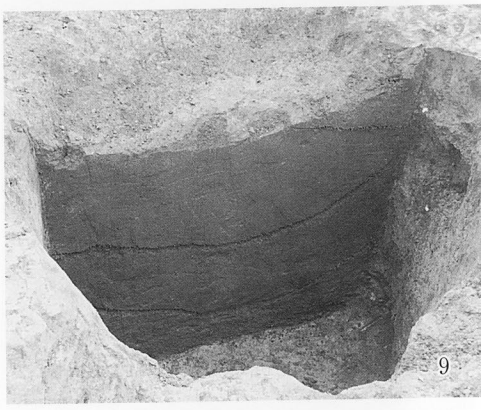


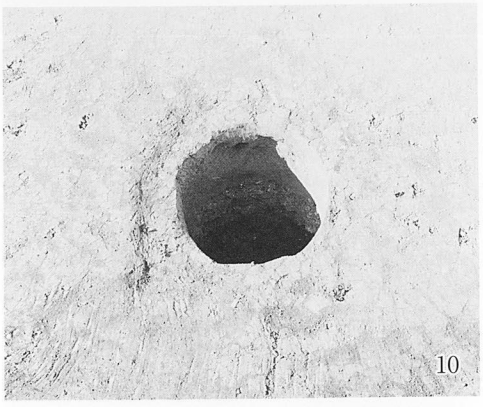


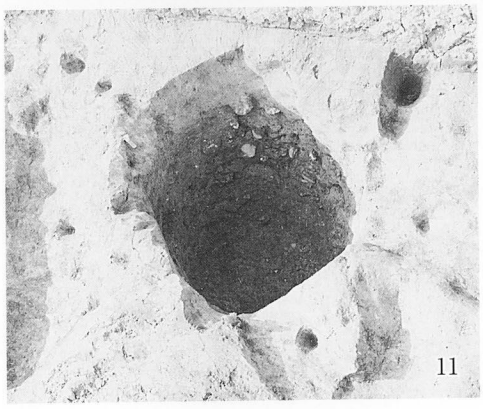


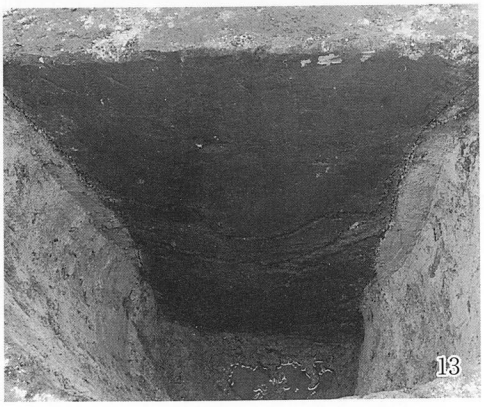


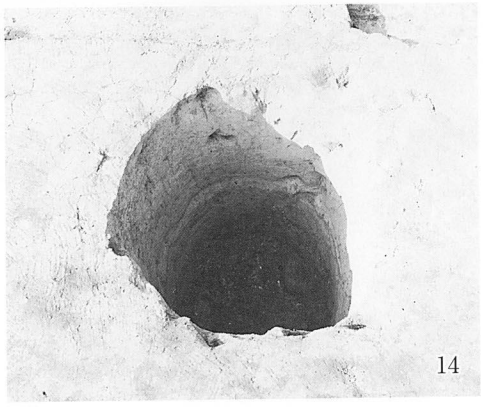




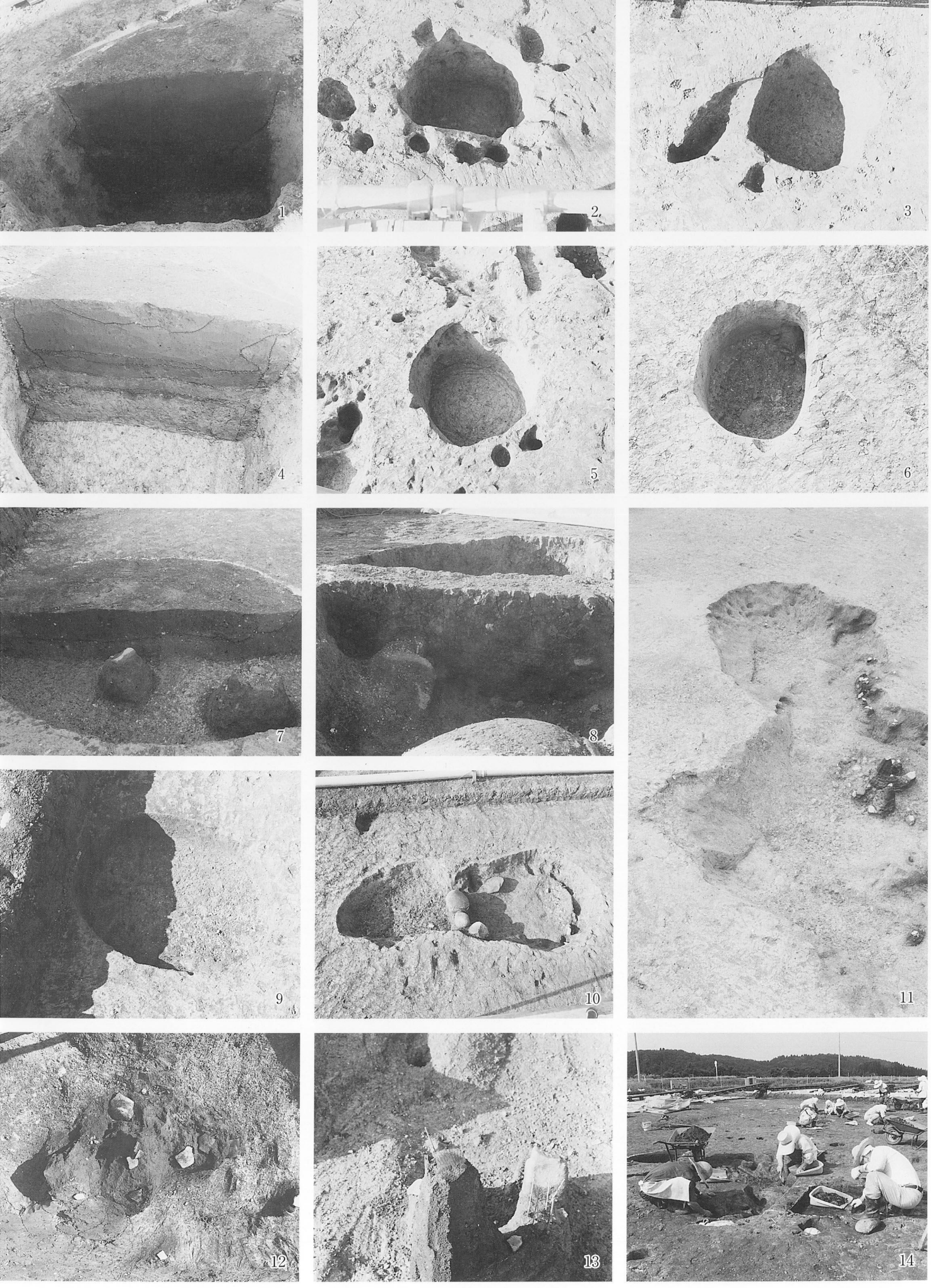




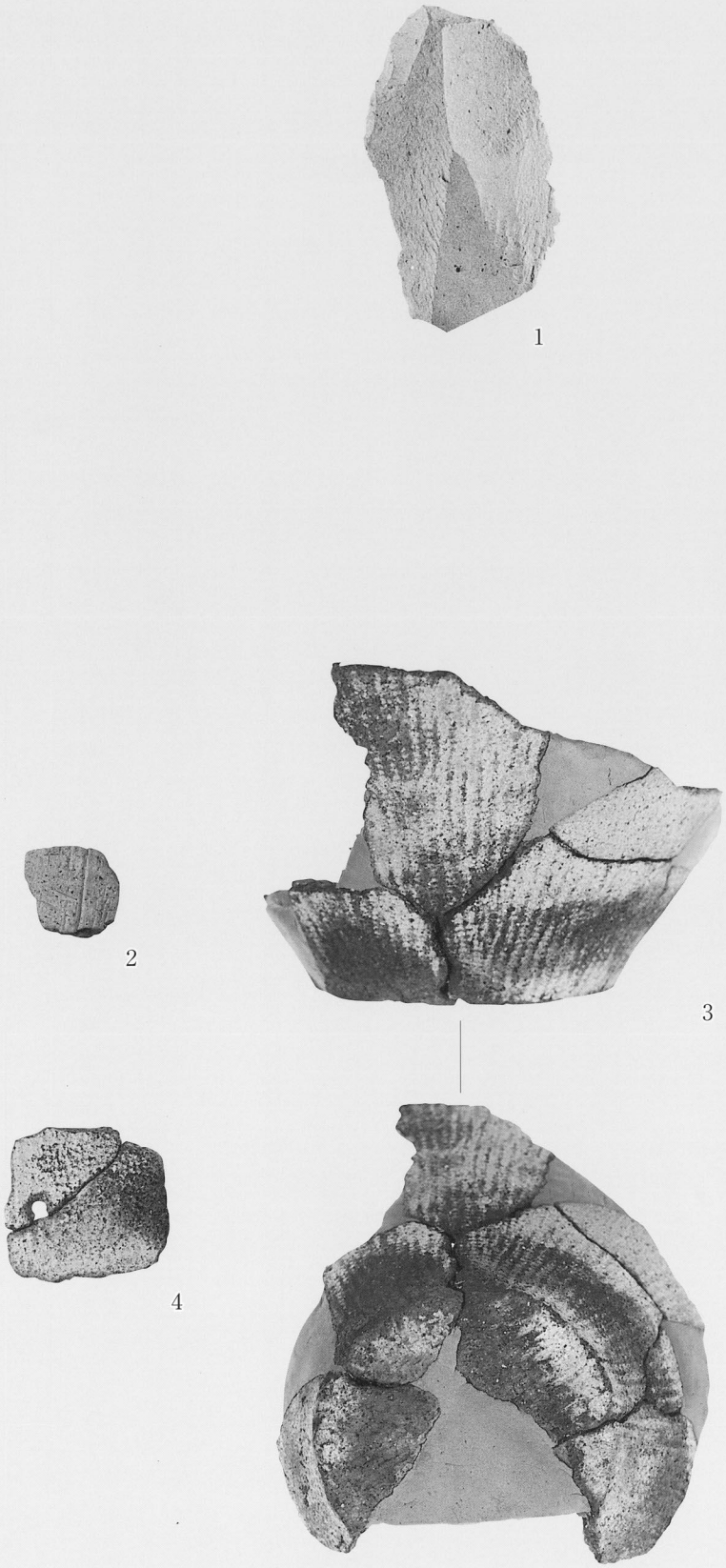




図版 5　1．SK04断面　2．SK06断面　3．SK09断面　4．SK04全景　5．SK06全景
6．SK09全景　7．SK10断面　8．SK13断面　9．SK14断面　10．SK10全景
11．SK13全景　12．SK14全景　13．SK17断面　14．SK17全景　15．SK18全景



図版 6　1．SK08断面　2．SK08全景　3．SK11全景　4．SK12断面　5．SK12全景　6．SK15全景　7．SK05断面
8．SK16断面　9．SK05全景　10．SK16全景　11．SX01遺物出土状況遠景　12．SX01遺物出土状況近景
13．SX01遺物出土状況近景　14．作業風景



図版 7　出土遺物　1 (1/2)　2 ～ 4 (1/3)

Ⅲ　鏡坂Ⅰ遺跡

1　概要

鏡坂Ⅰ遺跡は、山田川と辺呂川に挟まれた河岸段丘上に所在する。現況での遺跡を包括する台地は、南北幅で400～500m、東西方向では3㎞以上も連続する広大な平坦面となっている。同台地上には、本遺跡並びに前述の外輪野Ⅰ遺跡の他に、多くの遺跡の所在が知れらており、鏡坂遺跡自体もⅠ～Ⅲの3遺跡に分けられている。この内鏡坂Ⅲ遺跡は本遺跡の北側に隣接するもので、縄文時代の集落遺跡として周知されている。鏡坂Ⅰ遺跡はこの台地の北東側先端寄りでもほぼ中央部分に当たる。

調査区の標高は、南西端（A区）で81.0m 、北東端（L区）で75.5m であり、南西から北東に向かって緩やかに傾斜している。また調査区のほぼ中央部であるH区とⅠ区の間からF区の東側にかけてには、標高差で僅か50㎝ほどの浅い窪地（G区）が確認されている。

検出された遺構は竪穴住居跡3棟（いずれも縄文時代）、溝跡1条（時期不明）、土坑103基（縄文時代2基、時期不明101基）、遺物集中区（縄文時代の土器捨て場）1ヵ所、その他不明遺構および風倒木痕である。

旧石器時代の遺構は確認されなかったが、少量ながら遺物が確認されている。

縄文時代の遺構は、竪穴式住居跡と土器廃棄土坑と遺物集中区が中心となる。その時期は、いずれも中期を主体としている。住居跡は、先述した浅い窪地に面する縁辺部に位置する。遺存状況が悪いため、壁面や周溝の痕跡、炭化材の散布、ピット配置および硬化面の検出状況からその存在を確認した。土坑は、主にF区とⅠ区に検出された土器廃棄用と見られるタイプの他は、性格不明のものがほとんどである。遺物集中区はこの窪地部分にあたり、面積は僅かに約117㎡、層厚平均80㎝で、本遺跡で出土した総遺物量の約90%に相当する土器・土製品・石器・石製品等が出土している。

遺物は、縄文時代中期の所産とされる土器、土製品、石器、石製品を中心とし、他に少量の須恵器などを含み遺物整理箱約400箱分出土している。これらの遺物は遺構の内外を問わず、中期前葉の新崎式期から中葉の上山田・天神山式期、古府式期がそのほとんどを占める。また土製品では、耳飾、土偶、土版、土製円盤が出土している。石器類についてはとくに石錘が多く出土しているのが特徴で、他に打製石斧、磨製石斧、尖頭器、石核、剥片、石鏃、凹石、敲石、磨石、石皿、さらに被熱礫などが出土している。

今回の調査において検出された遺構・遺物は、G区の浅い窪地を取り囲むように検出された住居跡と、窪地内に堆積した大量の遺物、及び土坑群から構成される。道路部分に限定された調査であったため、断定はできないが、台地の中央部分に位置する浅い窪地を中心に遺跡が展開していることが想定される。これらの遺構・遺物が生活遺跡であるのか、または祭祀的な様相を示すものかは判断できていない。

一方で、北側に存在する鏡坂Ⅲ遺跡の存在も考慮に入れるならば、同一台地上に当該期の拠点的集落が複数展開していたことも伺わせるものである。今回の調査および前回の試掘調査で検出された住居跡は、これらの拠点的集落の縁辺部に位置するものと考えられる。（小村）

2　地区設定と層序（第11・12図）

本遺跡は国道359号線を挟んで南西から北東方向に向かって細長け続くため、現場で便宜的に地区割りを行った。Y=200ライン上の農道を境に、西側は水田に水を引くための塩化ビニールパイプを、東側は水田に入るための盛り土を区切りとして、西側から順にA～L区まで設定した。

グリットは、外輪野Ⅰ遺跡同様、10m×10mの大グリットの間に、2m×2mの小グリットを設定した。但しG～

Ｉ区については、遺物出土量が多いという試掘結果が出ていたため、Ｇ区は50㎝×50㎝、Ｈ・Ｉ区は１ｍ×１ｍのメッシュを設定して調査に望んだ。

基本層序は、本遺跡が国道を挟んで断絶があったり、圃場整備などで大きく削平を受けていたりして、全調査区の層序を統一することはできなかった。そのため、Ａ～Ｅ区、Ｆ・Ｇ区、Ｈ・Ｉ区、Ｊ・Ｋ区、Ｌ区と、５つに分けて基本層序を設定した。（第13図）

１　Ａ～Ｅ区（標準堆積土層Ｄ区）

１・２層：表土、３層：遺物包含層、４層：漸移層、５層：地山に大別される。１・２層は水田耕作土で、厚さは19～33㎝である。３層は黒色シルトで、厚さは18～25㎝である。４層は黒褐色粘質土で、厚さは数㎝～10㎝である。５層は褐色粘質土である。３層からは、縄文土器、須恵器、陶磁器の破片が出土しており、少なくとも古代以降の包含層であると思われる。この層は大きく削平を受けるためＡ～Ｅ区でしか確認されない。

２　Ｆ・Ｇ区（標準堆積土層Ｇ区）

１・２層：表土、３～５層：遺物包含層、６層：漸移層、７層：地山層に大別される。１層は明赤褐色土で、厚さは55～58㎝である。２層は水田耕作土で、黒褐色土、厚さは15～20㎝である。３層は黒色シルトで、炭化材を少量含み、土器片を多く含む。厚さは５～12㎝である。４層は黒褐色シルトで、炭化材を多く含み、大きな土器片や一個体になるものを多く含む。厚さは18～25㎝である。５層は黒褐色シルトで炭化材を多く含み、土器細片を少量含む。厚さは30～35㎝である。６層は暗褐色粘質土で、厚さは５～12㎝である。７層は明褐色粘質土で、厚さは16～25㎝である。なお、Ｆ区はほとんどが表土下はすぐ地山になるが、Ｇ区寄りのごく一部にだけ５層が確認される。

３　Ｈ・Ｉ区（標準堆積土層Ｈ・Ｉ区）

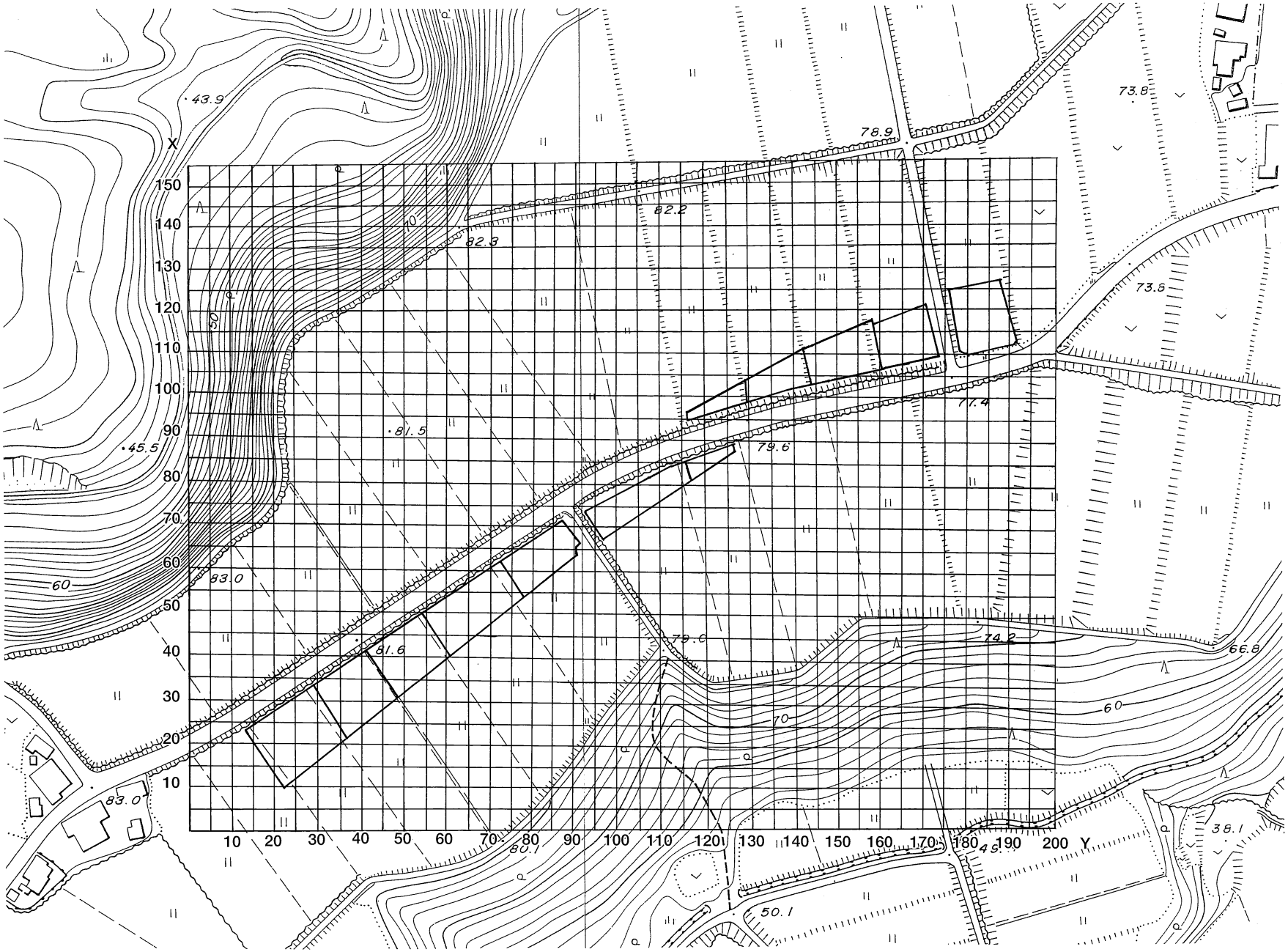
１～９層：遺物包含層、10層：漸移層、11層：地山層に大別される。表土は水田耕作土で、厚さは現地表面から100～116㎝ である。鍵となる遺物包含層は、５・８層でＨ・Ｉ区全体に存在する。５層は黒褐色シルトで、厚さは12～24㎝である。８層は暗褐色シルトで、厚さは16～24㎝である。その他の層については、１～３層は堆積も薄く、Ｈ区西側の一部にしか存在しない。１層は黒褐色シルト、２層は浅黄橙色砂質土、３層は黒褐色シルトで、厚さは約８～16㎝である。この１～３層が確認できなくなったＨ区のＹ=263ライン付近から、黒色シルトで厚さ８～20㎝の４層が確認され始め、Ｉ区のＹ=280ライン付近まで存在する。さらに、６・７・９層もＨ区の一部にしか存在しない。６層は灰褐色シルト、７層は褐灰色シルト、９層は極暗褐色シルトで、厚さは８～16㎝である。10層は漸移層でＹ=280ライン付近まではほぼ全体に存在するが、それ以東は所々にしか確認できない。灰褐色シルトで、厚さは４～８㎝である。地山層は、明褐色粘質土で長径１～２㎝の礫を微量に含む。

４　Ｊ・Ｋ区（標準堆積土層Ｋ区）

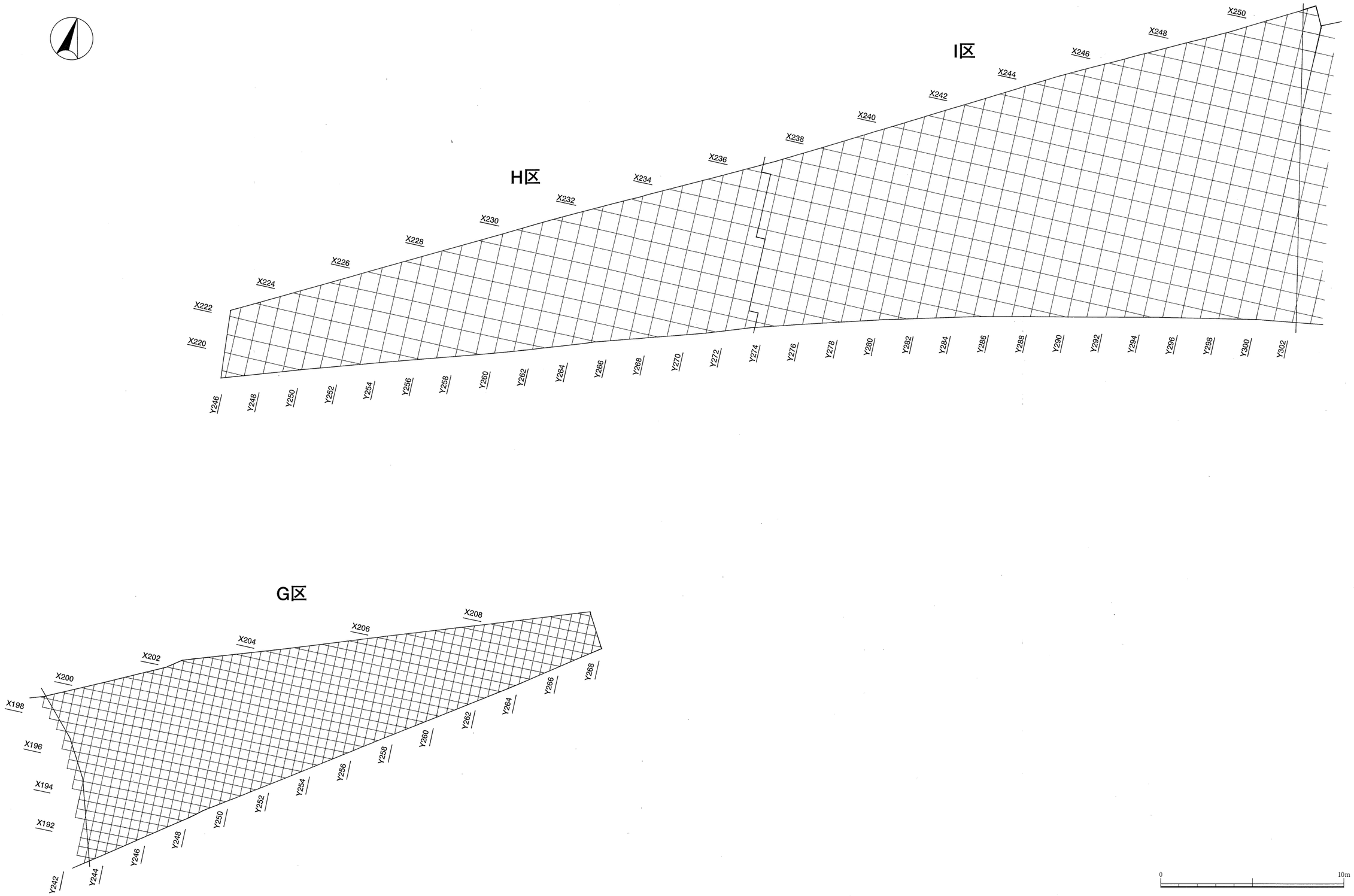
全体に表土のすぐ下は地山で、包含層は存在しない。Ｊ区には一部Ｋ区寄りに黒褐色シルトの攪乱もしくは包含層が残っているが、Ｈ・Ｉ区の遺物包含層とは一致しなかった。Ｋ区は、地山に断層が見られる。

５　Ｌ区（標準堆積土層Ｌ区）

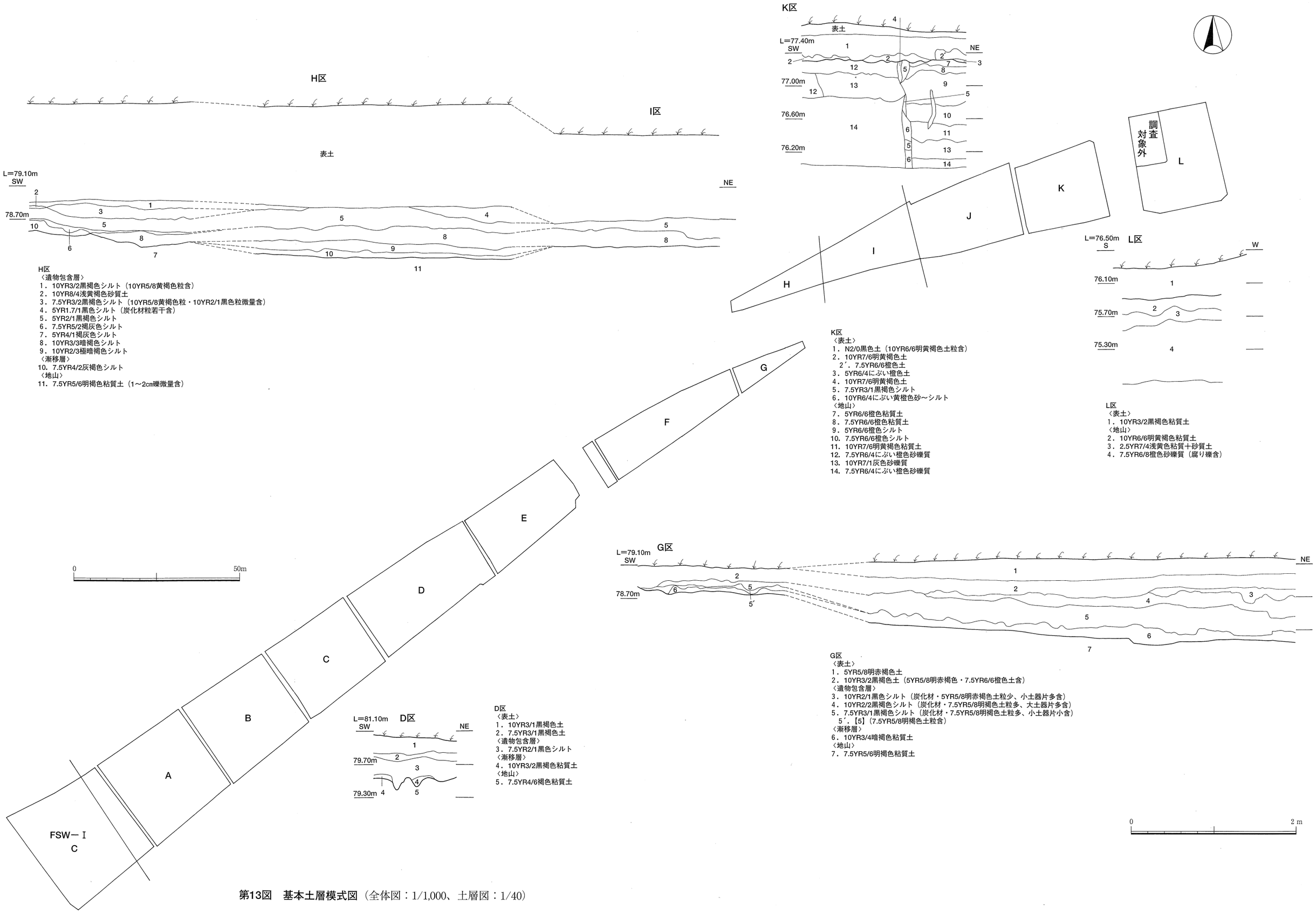
Ｊ・Ｋ区同様、表土のすぐ下は地山であるが、Ｋ区との間に大きな段差があるため、両者の間に同一の層位は確認できなかった。



第11図　区割り図（1/2,500）



第12図　小グリット設定図（1/200）



H区
〈遺物包含層〉
1．10YR3/2黒褐色シルト（10YR5/8黄褐色粒含）
2．10YR8/4浅黄褐色砂質土
3．7.5YR3/2黒褐色シルト（10YR5/8黄褐色粒・10YR2/1黒色粒微量含）
4．5YR1.7/1黒色シルト（炭化材粒若干含）
5．5YR2/1黒褐色シルト
6．7.5YR5/2褐灰色シルト
7．5YR4/1褐灰色シルト
8．10YR3/3暗褐色シルト
9．10YR2/3極暗褐色シルト
〈漸移層〉
10．7.5YR4/2灰褐色シルト
〈地山〉
11．7.5YR5/6明褐色粘質土（1～2cm礫微量含）

K区
〈表土〉
1．N2/0黒色土（10YR6/6明黄褐色土粒含）
2．10YR7/6明黄褐色土
2′．7.5YR6/6橙色土
3．5YR6/4にぶい橙色土
4．10YR7/6明黄褐色土
5．7.5YR3/1黒褐色シルト
6．10YR6/4にぶい黄橙色砂～シルト
〈地山〉
7．5YR6/6橙色粘質土
8．7.5YR6/6橙色粘質土
9．5YR6/6橙色シルト
10．7.5YR6/6橙色シルト
11．10YR7/6明黄褐色粘質土
12．7.5YR6/4にぶい橙色砂礫質
13．10YR7/1灰色砂礫質
14．7.5YR6/4にぶい橙色砂礫質

L区
〈表土〉
1．10YR3/2黒褐色粘質土
〈地山〉
2．10YR6/6明黄褐色粘質土
3．2.5YR7/4浅黄色粘質十砂質土
4．7.5YR6/8橙色砂礫質（腐り礫含）

D区
〈表土〉
1．10YR3/1黒褐色土
2．7.5YR3/1黒褐色土
〈遺物包含層〉
3．7.5YR2/1黒色シルト
〈漸移層〉
4．10YR3/2黒褐色粘質土
〈地山〉
5．7.5YR4/6褐色粘質土

G区
〈表土〉
1．5YR5/8明赤褐色土
2．10YR3/2黒褐色土（5YR5/8明赤褐色・7.5YR6/6橙色土含）
〈遺物包含層〉
3．10YR2/1黒色シルト（炭化材・5YR5/8明赤褐色土粒少、小土器片多含）
4．10YR2/2黒褐色シルト（炭化材・7.5YR5/8明褐色土粒多、大土器片多含）
5．7.5YR3/1黒褐色シルト（炭化材・7.5YR5/8明褐色土粒多、小土器片小含）
5′．【5】（7.5YR5/8明褐色土粒含）
〈漸移層〉
6．10YR3/4暗褐色粘質土
〈地山〉
7．7.5YR5/6明褐色粘質土

第13図　基本土層模式図（全体図：1/1,000、土層図：1/40）

3　遺構

検出された遺構は、竪穴住居跡３棟、溝跡１条、土坑103 基、遺物集中区１ケ所、不明遺構15基である。このうちＳＫ10・37は、後から遺構にはならないと判断したため欠番とした。またＳＸ05もＳＩ01に番号をつけ替えたため、同じく欠番とした。

(1)竪穴住居跡

ＳＩ01（第18図）

Ｄ区で検出した。平面形は円形で、規模は直径約470cm である。遺構確認面からの掘り込みの深さは、約10cmである。住居の３分の２以上はＳＸ02の風倒木痕に壊されており、炉も検出されなかった。住居の覆土は黒褐色シルトで炭化材を含んでいる。ＳＸ02の深さは遺構確認面から約100cmで、上面から約60cmまで焼土が含まれていた。

住居の長軸は、Ｎ－40°－Ｅの方位をとると思われる。主柱穴は、P_{01}、P_{04}、P_{07}で、４本主柱配置Ｘ型（橋本1976）または５本主柱配置Ｘ型になると思われる。P_{01}は長軸36cm×短軸34cm、床面からの深さ約47cmの円形、P_{04}は長軸30cm×短軸24cm、深さ約38cmの円形、P_{07}は長軸22cm×短軸15cm、深さ約42cmの楕円形である。

その他のピットについては、P_{02}は長軸40cm×短軸36cm、深さ約50cm、P_{03}は長軸25cm×短軸24cm、深さ約43cm、P_{05}は長軸27cm×短軸24cm、深さ約54cm、P_{06}は長軸40cm×短軸36cm、深さ約18cmで、平面形は円形である。P_{06}のみ他のピットと比べて床面からの掘り込みが浅く、ピット中一杯に深鉢の胴部片１点が出土している。主柱穴と考えられるものも含め、ピットの覆土は暗褐色シルトで炭化材を含んでおり、特に炭化材は底部に多く固まっている傾向を持つ。

遺物は、床面からやや浮いた状態で縄文時代中期に比定される土器片が数点出土した。遺物の大半はＳＸ02へ流れ込んでいる。

ＳＩ02（第19図）

Ｈ区で検出した。規模は長軸480cm、遺構確認面からの掘り込みの深さは約30cmで、平面形は長円形か卵形になると思われる。住居の３分の１は調査区外にかかっており、北東部分がトレンチに切られている。炉は検出されなかったが、周溝が確認された。周溝の規模は上幅約10～15cm、下幅約５～10cm、深さ約15cmである。しかし、完掘時には掘り過ぎのため、西側の一部分にしか確認できなかった。また、住居中央部には、厚さ約５cmの硬化面が検出された。

住居の長軸は、Ｎ－20°－Ｗの方位をとると思われる。主柱穴はP_{08}、P_{10}、P_{11}で、６本主柱穴Ｙ型または５本主柱穴Ｙ型の配列をとると思われる。P_{08}は短軸24cmの楕円形で、P_{09}に切られる。深さは50cmである。P_{10}は長軸27cm×短軸24cm、深さ約30cmの円形のプランである。P_{11}は長軸35cm×短軸27cmの円形に近い形で、床面からの深さは約48cmである。また、P_{09}、P_{12}は建て直しの際のものである可能性がある。P_{09}は長軸26cm×短軸22cm、深さ56cmの楕円形である。P_{12}は長軸17cm×短軸12cm、深さ約24cmの円形のプランである。P_{01}は、主軸から少しずれたところに位置し、貯蔵穴の可能性もある。規模は、長軸70cm×短軸53cm、床面からの深さ約33cmの楕円形である。P_{02}は長軸25cm、深さ約10cmの円形のプランで、P_{01}に３分の１切られる。P_{03}～P_{07}は周溝部分に掘り込まれ、支柱穴になると思われる。P_{03}は長軸20cm×短軸18cm、深さ約８cmの円形で、P_{04}は長軸25cm×短軸23cm、深さ約13cmの円形、P_{05}は長軸30cm×短軸12cm、深さ約８cmの楕円形、P_{06}は長軸25cm×短軸20cm、深さ20cmの楕円形、P_{07}は長軸20cm×短軸15cm、深さ９cmの楕円形である。柱穴の配置や、硬化面の残り具合から考えると、Ｔ字型の平面利用をしていたのではないかと考えられる。

覆土は、下層が黒褐色シルトで炭化材粒子を少量含む。上層は暗褐色シルトで硬くしまっている。人為堆積の状況

を示す。10層から掘り込まれている。

遺物は、縄文時代の土器、石器、黒曜石剥片が出土した。床着状態での出土はほとんどない。遺物は２ケ所に集中する傾向を見せる。黒曜石の剥片は、床下約20cmの周溝部分に当たると思われる場所からも１点出土した。時期は中期前葉から中葉までが主である。

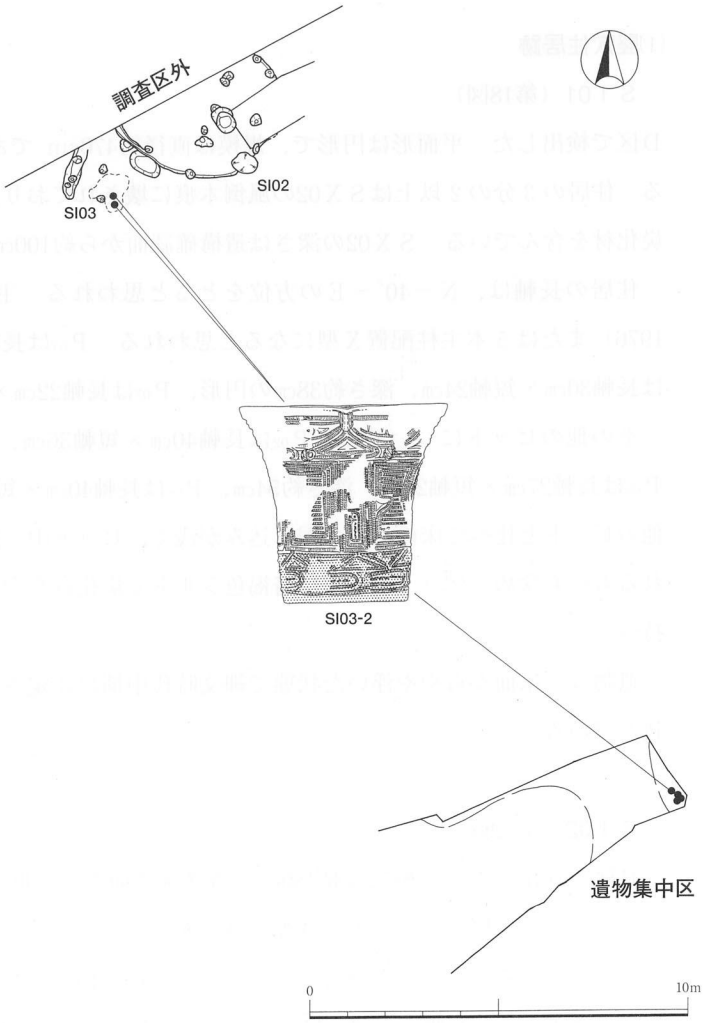
ＳＩ03（第19図）

Ｈ区で検出した。ＳＩ02に切られているため、平面規模は不明である。掘り込みの深さは遺構確認面から約12cmである。炉は検出されず、周溝が西側に僅かに確認された。上幅約35cm、下幅約20cm、深さ約24cmである。中央部には厚さ２～５cm程の硬化面も確認されている。

ピットについては、P_{01}～P_{03}が周溝部分に掘り込まれる。P_{01}は長軸20cm×短軸18cm、床面からの深さ約13cmの円形、P_{02}は長軸22cm×短軸18cm、深さ５cmの円形、P_{03}は長軸15cm×短軸12cm、深さ約４cmの円形のプランである。P_{04}は長軸25cm×短軸20cm、深さ約38cmの楕円形、P_{05}は長軸23cm×20cm、深さ39cmの楕円形である。

覆土は灰褐色シルトで、10層と似ているが、10層が堆積する以前のものであると思われる。

遺物は、床面よりも浮いた状態で縄文土器が出土した。中期前葉後半に位置づけられる。また２の土器は、中部高地の新道式の要素の強い深鉢形土器であるが、出土状況が口縁～胴上半部は住居覆土から、スクリーントーン部分の胴下半部が遺物集中区X207.5Y267.5グリットからと、離れた場所から出土したのは特筆すべき点である。（第14図）遺構の検出状況や、遺物の時期から、ＳＩ02よりも古い時期の住居と思われる。



第14図　ＳＩ03－２遺物接合状況図（1/200）

(2)溝跡

ＳＤ01（第20図）

幅は上場で170cm～230cm、下場で80cm～100cmである。平面形は多少蛇行しているが、南東方向から北西方向に向かって直線的に伸びている。遺構確認面からの掘り込みの深さは約80cmである。底部は一部礫層上面に達する。断面形は逆台形様を呈する。覆土は黒褐色シルトで、自然堆積と考えられる。溝上面は重機により大きく削平されている。

時期は不明だが、昭和53年の圃場整備前の地図には載っていないため、それ以前にすでに埋まっていたと考えられる。両端とも調査区外に伸び、外輪野Ｉ遺跡のＳＤ01とほぼ直角に交わると思われるが、両者が同時期のものであるかは判断できない。

⑶**土坑**（第21～25図）

103基が検出された。今回の調査で、遺構番号をつけるに当たり、土坑とピットとを分ける判断基準が曖昧であった為、規模の小さいピットについても土坑として通し番号をつけた。そこで報告書に掲載するに当たり、土坑の性格により３種類に分けることとした。１は、土器廃棄としての性格を持つ土坑である。Ｆ区のＳＫ11、Ｉ区のＳＫ68がこれに当たる。時期は縄文時代中期と考えられる。２は、掘り込みのしっかりした竪穴の土坑である。このうち、外輪野Ｉ遺跡の土坑同様、井戸に類する役割を果たしたと考えられるものが、Ｂ区のＳＫ02、Ｃ区のＳＫ05、Ｌ区のＳＫ102・104の４基である。他は、性格・時期共に不明なものである。３は、Ｆ・Ｇ区、Ｈ区、Ｉ区、Ｊ区の４ケ所にまとまって検出された性格不明の小型土坑群である。配置にはある程度の方向性が見られる。

１　土器廃棄土坑（第23・25図）

ＳＫ11は、長軸66㎝×短軸60㎝、深さ約18㎝の円形の土坑である。覆土は黒褐色土である。底面の約２㎝上から覆土一面に多量の土器がぎっしり重なり合った状態で出土した。遺物は縄文中期中葉後半の古府式が主である。

ＳＫ68は、平面規模が長軸246㎝×短軸213㎝ 、深さ24㎝の楕円形である。遺構確認面からの深さは約25㎝である。覆土は自然堆積の状況を示す。地山と黒褐色シルトが混ざった層の上に、図中では示せなかったが明褐色の山砂が薄く堆積する。その上に黒褐色シルト層が堆積する。この上層には、また明褐色の山砂が堆積し、さらに暗褐色シルトに炭化材の混入した層があり、堆積するまでに時間的空白が生じていることがわかる。遺構確認面では礫が出土しており、長径30～50㎝、短径20～35㎝、厚さ７～20㎝程の扁平に近い形である。遺物は、底面から４～５㎝上から上面まで出土した。縄文時代中期前葉から中葉までの土器と石器である。土器は特に中期中葉後半のものが主体を占める。廃棄土坑内にＳＫ69・70・71のピットが検出されたが遺構に伴うものではない。またＳＫ72・73についても同様である。

２　竪穴土坑（第21・22図）

ＳＫ02は、長軸132㎝、深さ約102㎝の楕円形で、礫層を若干掘り込む。用水パイプに半分かかっているため、正確な平面形は分からないが、おそらく円形であると思われる。覆土は自然堆積の状況を示し、黒褐色シルトである。ＳＫ05は、長軸156㎝×短軸150㎝、深さ約120㎝の円形の土坑で、掘り込みは礫層を掘り込む。覆土は底面から約50㎝が人為堆積、上面が自然堆積の状況を示す。下層は２層に分かれ、下は灰黄褐色粘土で、10～15㎝程の礫を含む。上は黒色粘質土である。上層は黒色シルト。ＳＫ102は、長軸120㎝×短軸114㎝、深さ約132㎝の円形の土坑で、掘り込みは礫層を大きく掘り込む。覆土は底面から約100㎝までが人為堆積、上層が自然堆積の状況を示す。共に黒褐色シルトで炭化材粒子を含む。自然堆積部分に縄文土器片を含む。ＳＫ104は、長軸150㎝×130㎝、深さ約110㎝の楕円形の土坑で、礫層を掘り込む。底面から75㎝が人為堆積、上面が自然堆積の状況を示す。下層は２層に分かれ、下は灰黄褐色シルトで礫を含み、上は黒褐色シルトである。上面は黒褐色シルト主体で炭化材粒子を含む。上から約25㎝までのところから縄文土器片が出土した。流れ込んだもので遺構には伴わない。ＳＫ102、104は南北方向に並んでいる。これらの土坑は、外輪野Ｉ遺跡の土坑と同一の性格で、同時期に存在したと考えている。

ＳＫ01は、長軸85㎝×短軸75㎝、深さ約55㎝の円形で、掘り込みは礫層上面に達する。人為堆積で、黒色土に炭化材粒子を極微量に含む。ＳＫ03は、長軸90㎝×短軸75㎝、深さ約15㎝の楕円形である。ＳＫ04は、短軸108㎝、深さ約５㎝の楕円形の土坑である。人為堆積で、底部に炭化材粒子と焼土粒子が多く混入している。北東部３分の１が用水パイプにかかる。近年のゴミを燃やした穴の可能性がある。ＳＫ06は、長軸84㎝×短軸72㎝、深さ約18㎝の円形の土坑で、自然堆積である。炭化材ブロックが極微量に混入し、土器片が出土した。ＳＫ07は、長軸90㎝×短軸69㎝、深さ約18㎝の楕円形の土坑である。ＳＫ06の東側に隣接して検出され、堆積状況はＳＫ06と同様である。ＳＫ08は長軸132㎝×短軸120㎝、深さ約69㎝の円形の土坑である。人為堆積で、炭化材ブロックが混入し、土器片が出土した。

ＳＫ09は、長軸87㎝×短軸66㎝、深さ約12㎝の楕円形で、自然堆積で、炭化材が混入し、遺構の上面で焼土が堆積している。ＳＫ04同様、近年のゴミを燃やした穴の可能性がある。ＳＫ101 は、長軸63㎝×短軸60㎝、深さ約58㎝の円形の土坑で、覆土は自然堆積の状況を示し、暗褐色シルトが主であり、土器片が出土した。ＳＫ103は、長軸96㎝×短軸78㎝、深さ約67㎝の楕円形の土坑で、覆土は自然堆積の状況を示し黒色シルトが主で、土器片が出土した。ＳＫ105は、調査区外にかかるため平面形は不明だが、規模は長軸で70㎝、深さ約15㎝である。自然堆積で、黒褐色シルトである。

4　土坑群

①Ｆ・Ｇ区土坑群（第23図）

東西方向に、幅３ｍの帯状の範囲に集中している。この部分の土坑のほとんどから遺物が出土したが、遺構には伴わない。平面規模は、60～80㎝台、40～50㎝台、30㎝以下と凡そ３種類に分かれる。遺構確認面からの深さは、29㎝以下が最も多い。次に30㎝台のものがくる。全体的に浅いものが多い。遺構確認は、大半は５層中から確認できたが、遺構の覆土の色との差がほとんどなく、また、５層中で掘り上がってしまったものもいくつかあったため、最終的には地山層で行った。ＳＫ56は４層で確認し、地山層を１～２㎝程掘り込んで完掘した。覆土は10YR3/2黒褐色シルト、10YR2/2黒褐色シルトで、炭化材と土器片を含む。土坑の堆積状況は、明確な人為堆積の様子は示されず、ほとんどが自然堆積であると考えて良いだろう。ＳＫ44とＳＫ45は一部切り合い関係にあり、ＳＫ45の方がＳＫ44より新しい。ＳＫ28は底部に焼土と炭化材が確認された。ＳＫ46は上面の中央部分、長径22㎝×短径20㎝、深さ約７㎝の範囲に焼土が散らばっており、遺物は上層のみから出土した。ＳＫ50は円形で５層から検出された。

②Ｈ区土坑群（第24図）

ＳＫ60を中心にＳＫ61～65が周囲を囲んでいる。ＳＫ60を炉とした主柱穴の配置に類似するが、炭化材や有機物などは出土せず、炉である可能性は低い。ＳＫ60は長軸110㎝×短軸102㎝、深さ約25㎝の円形で、ＳＫ61～65は平均して直径34㎝、深さ32㎝である。ＳＫ58は、長軸90×短軸84㎝、深さ約50㎝の円形で、縄文土器が出土している。ＳＫ59は、長軸60㎝、深さ約20㎝の円形で、北東部４分の１をＳＫ58に切られている。

③Ｉ区土坑群（第25図）

特に目につく配置は認められない。大きさは28～30㎝台と40～50㎝、65㎝程で自然堆積のものが多い。覆土は黒褐色シルトである。

④Ｊ区土坑群（第22図）

ＳＫ90は長軸123㎝×短軸107㎝、深さ約50㎝の円形の土坑で、縄文時代中期土器片が出土している。ＳＫ90を中心として、住居の炉と柱穴の配置に類似するが、その可能性は低い。

⑷遺物集中区（第26～29図）

遺物集中区であるＧ区は台地のほぼ中央部に位置する。地形は、南から北に向かって緩く傾斜しており、南端で標高78.520ｍ、北端で標高78.060ｍと、約50㎝の傾斜である。この傾斜はＨ・Ｉ区に向かってゆき、現道路下で最も深くなり、Ｈ・Ｉ区の南端あたりで上がり切ると考えられ、浅い窪地若しくは谷頭部と想定した。ロームの上に、有機質の黒褐色土が堆積していて、この黒褐色土から多量の縄文時代の土器・土製品・石器・石片・炭化物が出土した。縄文時代の住居跡は、Ｄ区で標高80.400ｍ、Ｈ・Ｉ区で標高78.900ｍ～78.600ｍの間で検出され、この窪地を取り囲むように立地している。換言すればそれよりも低い場所に土器・石器がごみ捨て場状に展開するように見受けられた。遺物を内包する黒褐色土層は、その色調や、炭化材の含有量の多少、遺物の出土量・状況等から、３層に分層することができた。層位は標準堆積土層と同様で、遺物包含層である３層は、10YR2/1黒色シルトで炭化材・5YR5/8

明赤褐色粒子を少量含む。土器は比較的小さめの破片を多く含んでいる。この層は、Y254ライン付近から確認されており、厚さは最大で24㎝前後である。４層は、10YR2/2黒褐色シルトで、炭化材・7.5YR5/8明褐色土粒子を多く含み、土器は大形の破片やある程度形を保っているものを多く含む。この層は、Y252ライン付近から確認され、厚さは最大で28㎝前後である。この層から出土した遺物が総遺物出土量の約80%を占めるといっても過言ではない。縄文時代中期前葉～中葉までが確認され、中葉が中心をなす。５層は、7.5YR3/1黒褐色シルトで、炭化材・7.5YR5/8明褐色土粒子を多量に含む。土器は、４層との境に多少含まれるが、ほとんどは細片を少量含むのみである。厚さは、最大で40㎝である。

土器は、前葉のものに小破片が多く、中葉になると大形の破片が多くなる。層位による時期的な区分は明確にはできなかったが、復元された土器を型式毎に分類してその位置を記してみると（第26・27図)、時期により出土する地点が少し違っているようである。標商の低いY262のライン以東に中期前葉後半の土器が形を保って検出される割合が高く、このライン以西のやや高い方に中期中葉の土器が形を保って検出される傾向がある。

また、重量により分布状況をみていくと（第28・29図)、X202～207.5 、Y255～261.5 の約南北５ｍ、東西７ｍの間に１グリットにつき7,000g以上の量が集中している。最も量の多かったのは、X205.5Y257.5グリットで、23,400g である。さらに、Ｈ・Ｉ区との関連で考えると、国道付近の方がより量が多く、おそらく、現在の国道下が「土器捨て場」の中心となり、遺物量も最も多くなると考えられる。

出土状況から、土器をむやみにほうり投げ捨てただけとは考えにくく、大形の礫を中心にドーナッツ状の円を描いて置くように配置して捨てていたような印象を受けた。特に、４層は、横倒しになったまま潰れたものや、縦方向に正位や逆位で出土したものが目立つ。今回の調査ではそれを明確にすることは出来なかったが、廃棄行為に何らかの規則性があったものと考えたい。また、この大形の礫の配置から遺構の存在も推測されたが、確認するには至らなかった。

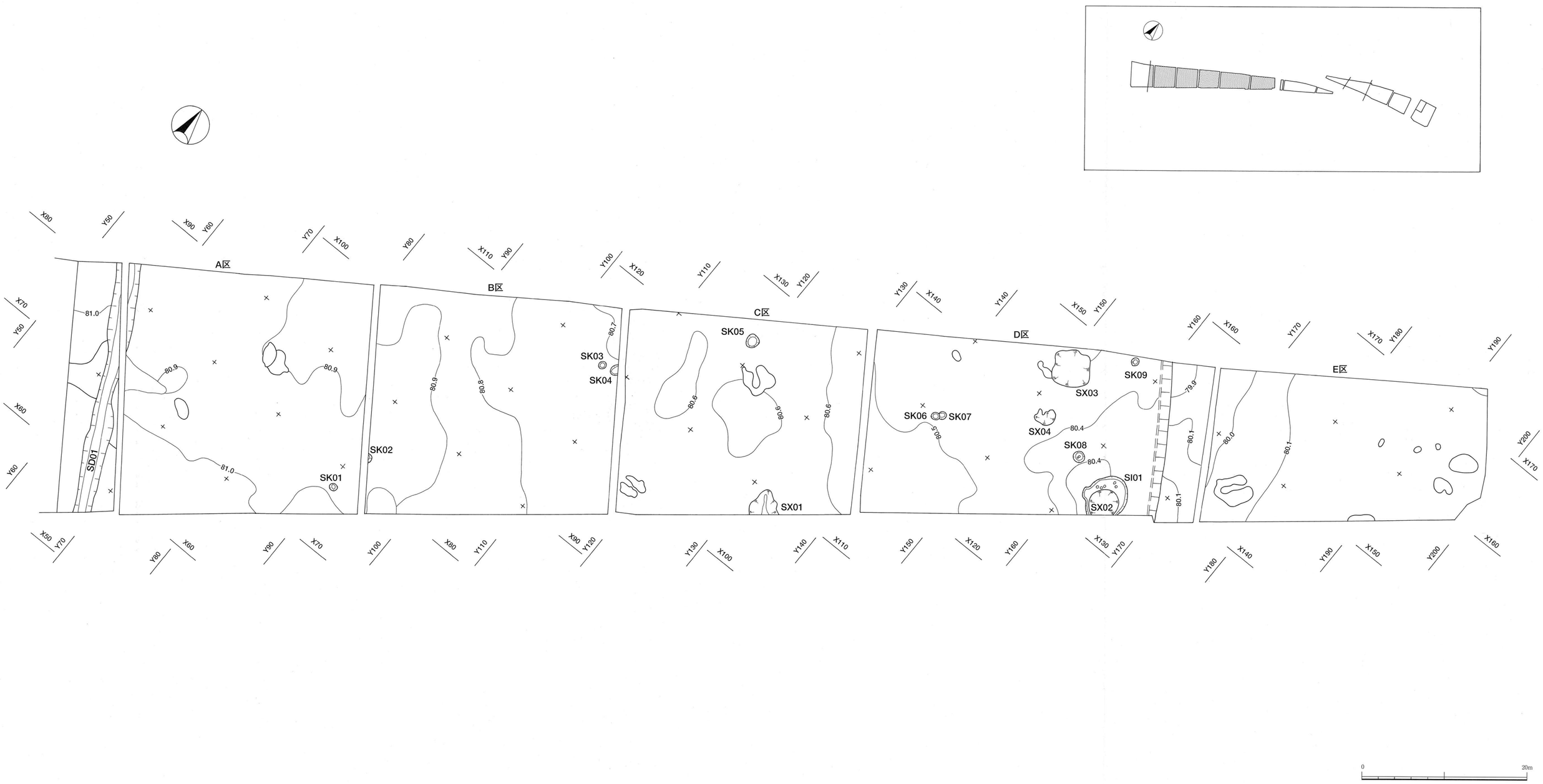
石器は、礫石錘の出土量の多さが注目される。当遺跡の石錘の多さは、昭和53年の試掘調査の段階から注目されており、婦中町の遺跡で最も多くの出土を見ている。近くを流れる山田川との関係が推測される。また、礫も多量に出土しており、拳大のものが多い。中には焼石も混在している。さらに土偶・耳飾・円盤土製品等の土製品も出土している。また、この狭い調査区から考えると、ミニチュア土器の出土量の多さが特筆される。この事と土偶が出土している事から何らかの祭祀行為が行われていた可能性も推察される。また、有機質のものも捨てられていたのだろうが、それらは腐敗し、結果的に土器や石器等の遺物が残った状態と思われる。

(5)不明遺構（第24図)

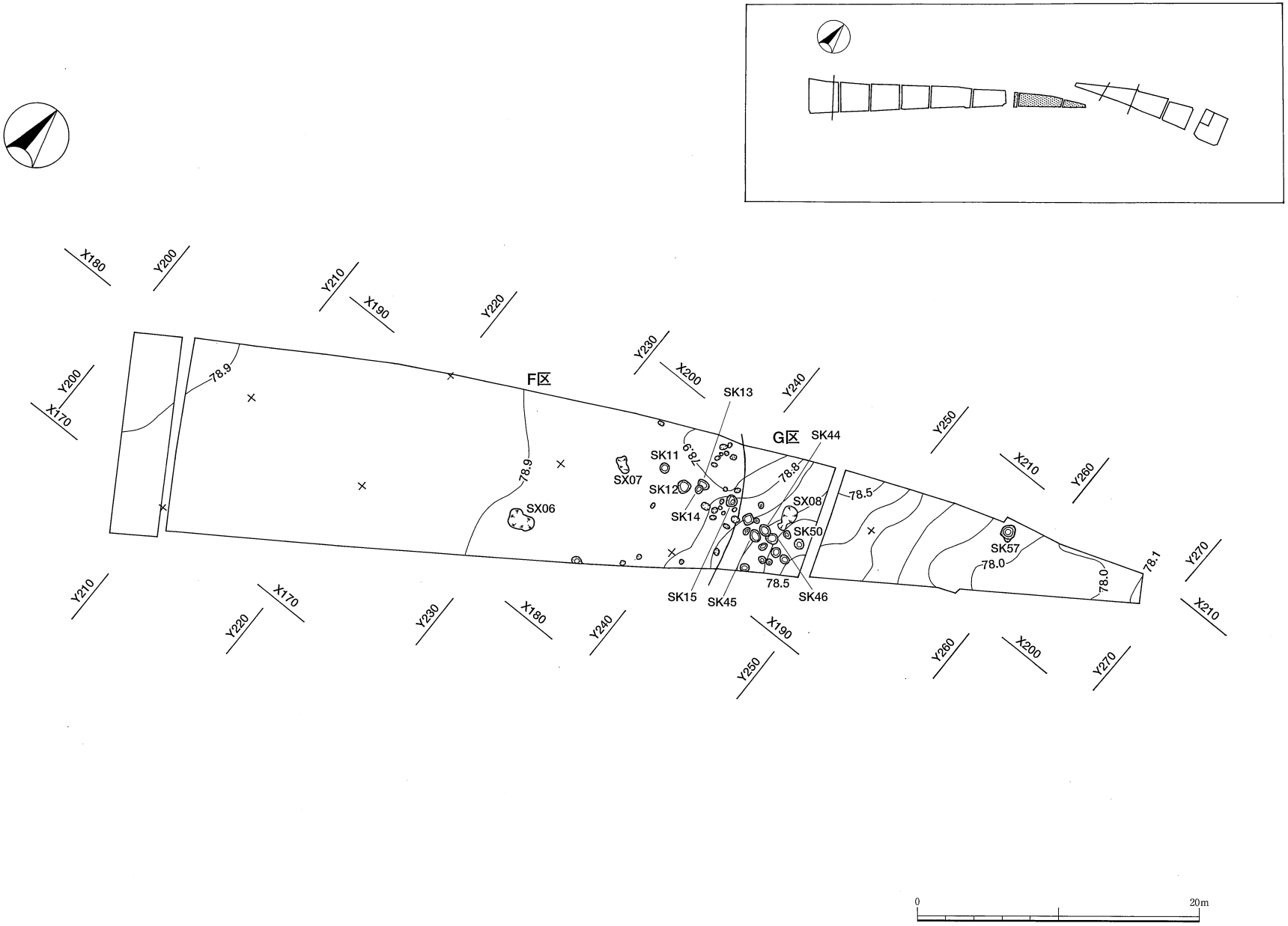
不明遺構は15ケ所検出された。そのうち、ＳＸ09が道状の硬化面で、その他は全て遺物の流れ込んだ風倒木痕である。風倒木痕からは、縄文土器の破片が数点出土しているのみである。但し、ＳＸ09の下で検出されたＳＸ10だけは、深鉢の底部と胴部がある程度形を保ったまま出土したので、風倒木痕を利用して土器を廃棄した可能性もある。また、出土した土器遺物は縄文時代中期前葉後半～中葉に比定されるもので、ＳＩ03出土遺物と時期的に近いと思われる。ＳＸ09は、南西より北東方向に長い210㎝×40㎝の長方形を呈する。覆土は、黒褐色土で５～６㎜の礫が混入している。北東端部には大きさ約30㎝×20㎝、厚さ約10㎝の礫が、風倒木痕の覆土に少し傾斜した状態で検出された。道に形状が似ているが、用途は不明である。Ｈ－５層の上から検出されたので、時期は少なくともＳＩ02の住居よりは新しいと考えられる。

表３　土坑一覧表

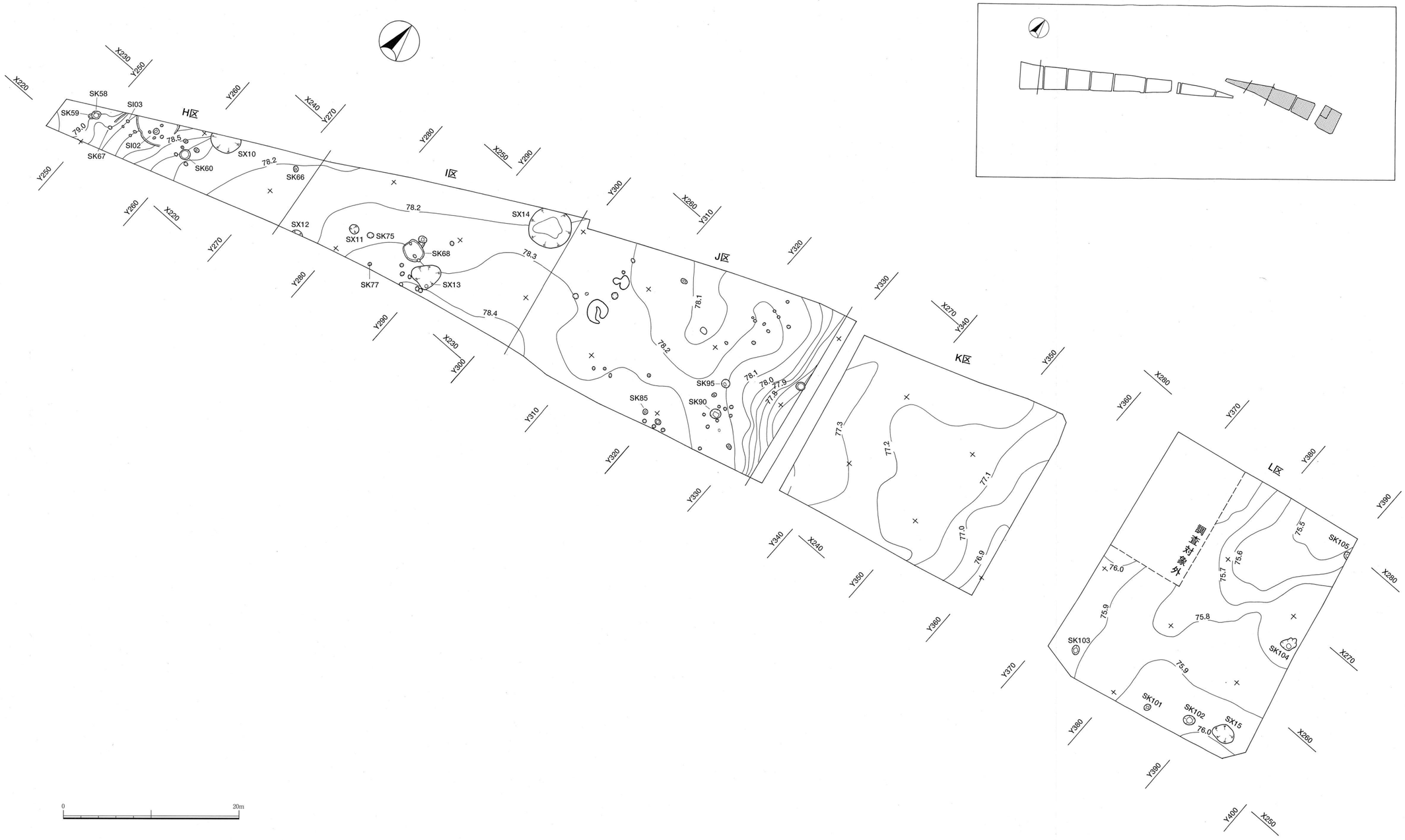
調査区	土坑No.	平面形態	断面形態	規模 長軸×短軸×深さ(cm)	出土遺物・備考
A	SK01	円形	鍋底状	85×75×55	
B	SK02	円形か	逆台形状	132×－×102	
B	SK03	楕円形	皿状	90×75×15	
B	SK04	楕円形	皿状	－×108×15	底部に炭化材・焼土粒子多量混入。
C	SK05	円形	逆台形状	156×150×120	
D	SK06	円形	鍋底状	84×72×18	
D	SK07	楕円形	鍋底状	90×69×18	縄文土器片出土。
D	SK08	円形	鍋底状	132×120×69	縄文土器片出土。
D	SK09	楕円形	皿状	87×66×12	遺構上面に焼土堆積。
F	SK11	円形	鍋底状	66×60×18	土器廃棄土坑。縄文中期中葉後半。
F	SK12	楕円形	皿状	80×70×10	縄文土器片出土。
F	SK13	円形	皿状	70×－×5	遺構確認面で縄文土器出土。
F	SK14	楕円形	皿状	50×40×19	縄文土器片出土。
F	SK15	楕円形	皿状	80×60×15	縄文土器片出土。
F	SK16	楕円形	すり鉢状	42×30×17	
F	SK17	円形	皿状	25×24×10	
F	SK18	楕円形	鍋底状	45×34×20	
F	SK19	楕円形	U字状	20×15×18	
F	SK20	楕円形	U字状	28×20×21	
F	SK21	楕円形	U字状	40×30×30	
F	SK22	楕円形	皿状	42×27×15	
F	SK23	楕円形	U字状	38×25×30	
F	SK24	楕円形	皿状	25×20×10	
F	SK25	楕円形	鍋底状	35×25×20	
F	SK26	楕円形	皿状	50×40×10	
F	SK27	楕円形	皿状	45×25×16	縄文土器片出土。
F	SK28	円形	鍋底状	33×30×20	縄文土器片出土。
F	SK29	楕円形	鍋底状	43×33×30	縄文土器片出土。
F	SK30	楕円形	鍋底状	33×24×15	
F	SK31	円形	皿状	25×24×9	
F	SK32	楕円形	U字状	35×30×35	縄文土器片出土。
F	SK33	楕円形	皿状	37×25×13	
F	SK34	楕円形	逆台形状	40×26×30	縄文土器片出土。
F	SK35	楕円形	鍋底状	37×25×25	
F	SK36	楕円形	鍋底状	32×25×30	
F	SK38	楕円形	すり鉢状	37×28×15	
F	SK39	円形	U字状	55×－×33	
F	SK40	楕円形	皿状	35×25×10	
G	SK41	楕円形	U字状	37×22×30	縄文土器片出土。
G	SK42	円形	U字状	30×27×15	
G	SK43	楕円形	皿状	65×50×15	縄文土器片出土。
G	SK44	円形	鍋底状	75×72×26	縄文土器片・被熱礫出土。
G	SK45	円形	鍋底状	70×69×20	縄文土器片出土。
G	SK46	楕円形	逆台形状	75×65×35	縄文土器片出土。
G	SK47	楕円形	皿状	36×26×7	縄文土器片出土。
G	SK48	楕円形	鍋底状	42×30×28	
G	SK49	円形	皿状	60×57×20	
G	SK50	円形	U字状	64×60×65	縄文土器片出土。
G	SK51	楕円形	鍋底状	52×40×23	
G	SK52	円形	鍋底状	40×36×10	
G	SK53	円形	鍋底状	35×33×18	縄文土器片出土。
G	SK54	円形	鍋底状	43×36×20	縄文土器片出土。
G	SK55	円形	皿状	40×36×15	縄文土器片出土。
G	SK56	楕円形	U字状	27×22×31	縄文土器片出土。
G	SK57	円形	逆台形状	108×96×126	縄文中期中葉～後葉土器出土
H	SK58	円形	鍋底状	90×84×50	縄文土器片出土。
H	SK59	円形か	鍋底状	60×－×20	
H	SK60	円形	鍋底状	110×102×25	
H	SK61	楕円形	U字状	45×35×40	
H	SK62	円形	U字状	36×30×35	
H	SK63	円形	U字状	36×30×35	
H	SK64	円形	U字状	30×30×37	
H	SK65	円形	鍋底状	24×21×15	
H	SK66	円形	鍋底状	60×54×25	H－11層下から掘り込まれる。
H	SK67	円形	鍋底状	32×27×40	縄文土器片出土。
I	SK68	円形	皿状	246×213×24	土器廃棄土坑。中期中葉～後葉。
I	SK69	円形	皿状	28×27×21	縄文土器片出土。
I	SK70	楕円形	U字状	25×15×34	縄文土器片出土。
I	SK71	楕円形	皿状	35×25×14	
I	SK72	楕円形	逆台形状	100×65×36	
I	SK73	不整形	皿状	－×－×10	縄文土器片出土。
I	SK74	円形	すり鉢状	42×39×20	縄文土器片出土。
I	SK75	円形	すり鉢状	66×64×35	縄文土器片出土。
I	SK76	円形	U字状	28×27×45	縄文土器片出土。
I	SK77	楕円形	U字状	35×25×25	縄文土器片出土。
I	SK78	円形	逆台形状	39×33×20	
I	SK79	円形	U字状	36×30×28	
I	SK80	円形	鍋底状	52×45×35	
I	SK81	円形	U字状	48×45×30	縄文土器片出土。
I	SK82	円形	U字状	42×－×32	
I	SK83	円形	U字状	21×18×35	
I	SK84	円形	鍋底状	45×42×16	縄文土器片出土。
J	SK85	円形	鍋底状	50×48×25	縄文土器片出土。
J	SK86	円形	U字状	35×33×35	
J	SK87	楕円形	U字状	35×30×30	
J	SK88	楕円形	U字状	45×35×28	
J	SK89	円形	鍋底状	60×57×25	
J	SK90	円形	すり鉢状	123×107×50	縄文土器片出土。
J	SK91	楕円形	U字状	26×21×18	
J	SK92	楕円形	U字状	27×20×32	
J	SK93	楕円形	U字状	29×24×18	
J	SK94	楕円形	U字状	41×33×53	
J	SK95	楕円形	逆台形状	81×67×59	
J	SK96	円形	U字状	30×30×57	
J	SK97	楕円形	U字状	28×21×50	
J	SK98	楕円形	U字状	33×21×36	
J	SK99	円形	U字状	24×21×26	
J	SK100	円形	U字状	27×24×36	
L	SK101	円形	逆台形状	63×60×58	縄文土器片出土。
L	SK102	円形	逆台形状	120×114×132	縄文土器片出土。
L	SK103	円形	逆台形状	96×78×67	縄文土器片出土。
L	SK104	楕円形	逆台形状	150×130×114	
L	SK105	不明	皿状	70×－×15	



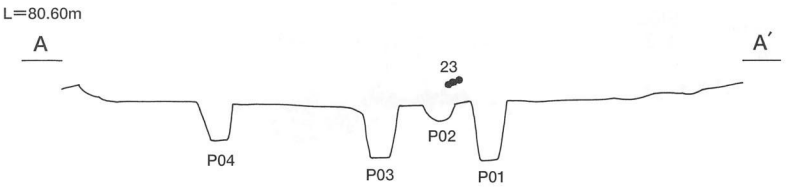
第15図　遺構配置図(1)（1/400）

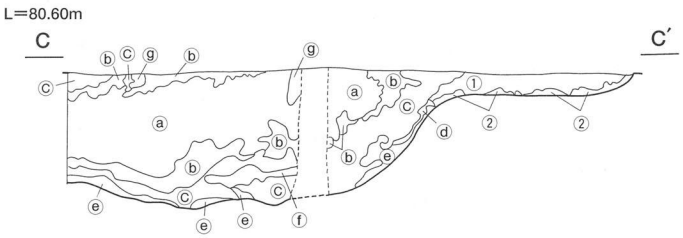


第16図　遺構配置図(2)（1/400）



第17図　遺構配置図(3)（1/400）



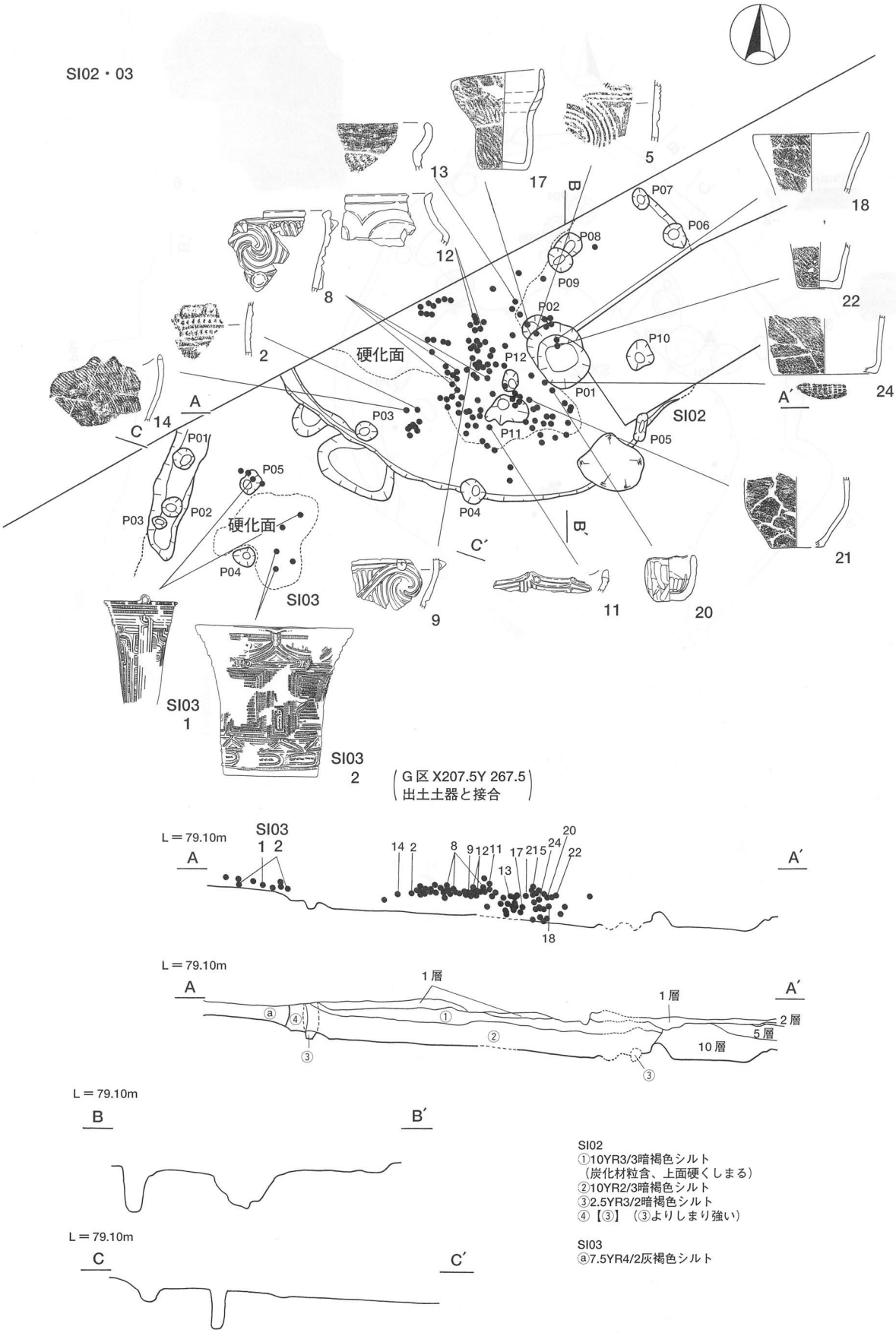


SI03
①10YR3/2黒褐色シルト
（炭化材・ⓐ7.5YR5/6明褐色土粒含）
②【①】（ⓐ多含）

SX02
ⓐ2.5YR5/8明赤褐色土（10YR3/1黒褐色土粒含）〈焼土〉
ⓑ【ⓐ】（5YR3/1黒褐色土含）
ⓒ7.5YR2/2黒褐色シルト（炭化材・ⓐ粒含）
ⓓ7.5YR4/4褐色シルト
ⓔ7.5YR5/6明褐色粘質土
ⓕ【ⓔ】（礫ブロック含）
ⓖ10YR4/1褐灰色粘質土（ⓐ粒含）

第18図　ＳＩ０１（1/60）

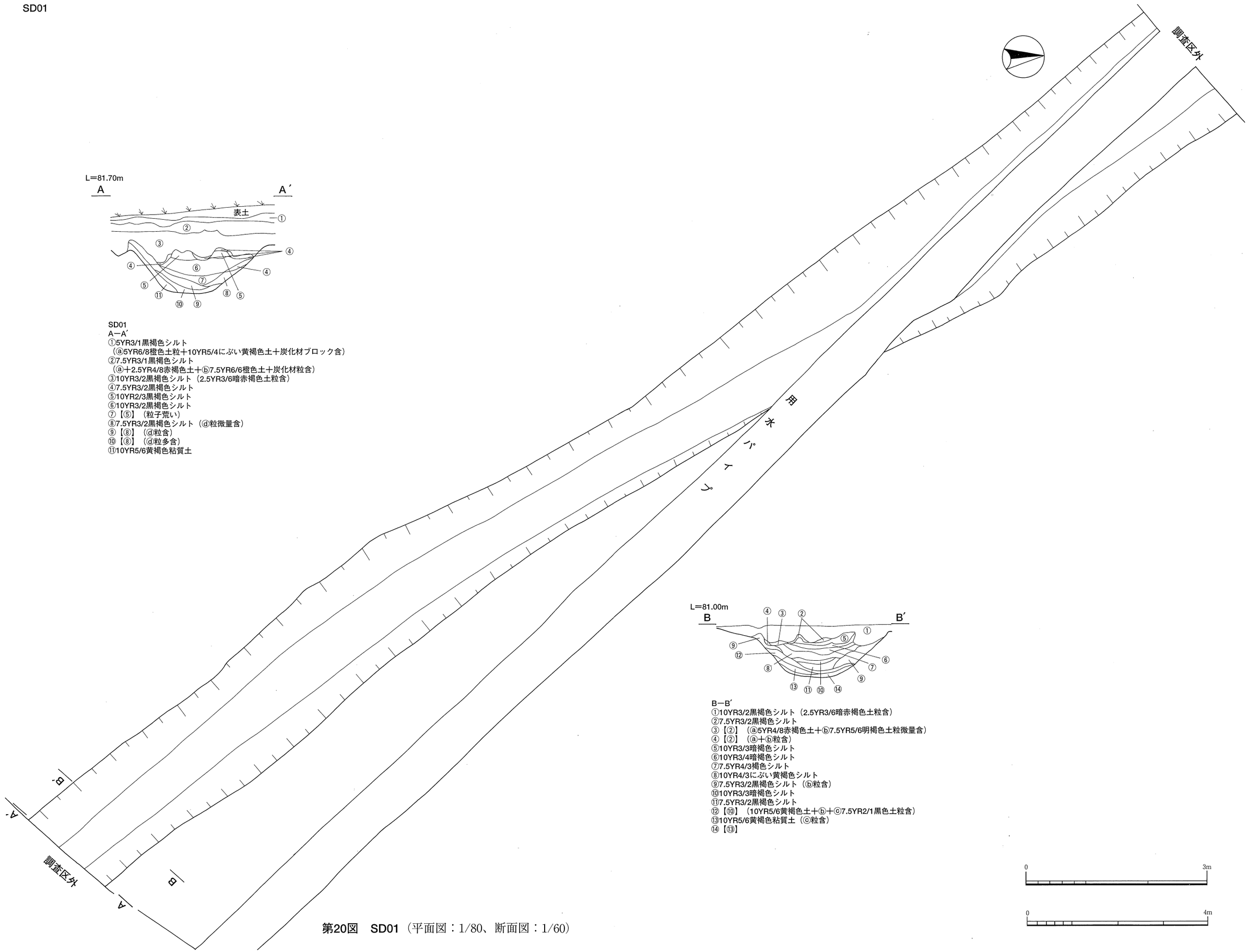
0　3m



第19図　ＳＩ０２・０３（1/60）

SD01

SD01
A−A′
①5YR3/1黒褐色シルト
（ⓐ5YR6/8橙色土粒＋10YR5/4にぶい黄褐色土＋炭化材ブロック含）
②7.5YR3/1黒褐色シルト
（ⓐ＋2.5YR4/8赤褐色土＋ⓑ7.5YR6/6橙色土＋炭化材粒含）
③10YR3/2黒褐色シルト（2.5YR3/6暗赤褐色土粒含）
④7.5YR3/2黒褐色シルト
⑤10YR2/3黒褐色シルト
⑥10YR3/2黒褐色シルト
⑦【⑤】（粒子荒い）
⑧7.5YR3/2黒褐色シルト（ⓓ粒微量含）
⑨【⑧】（ⓓ粒含）
⑩【⑧】（ⓓ粒多含）
⑪10YR5/6黄褐色粘質土

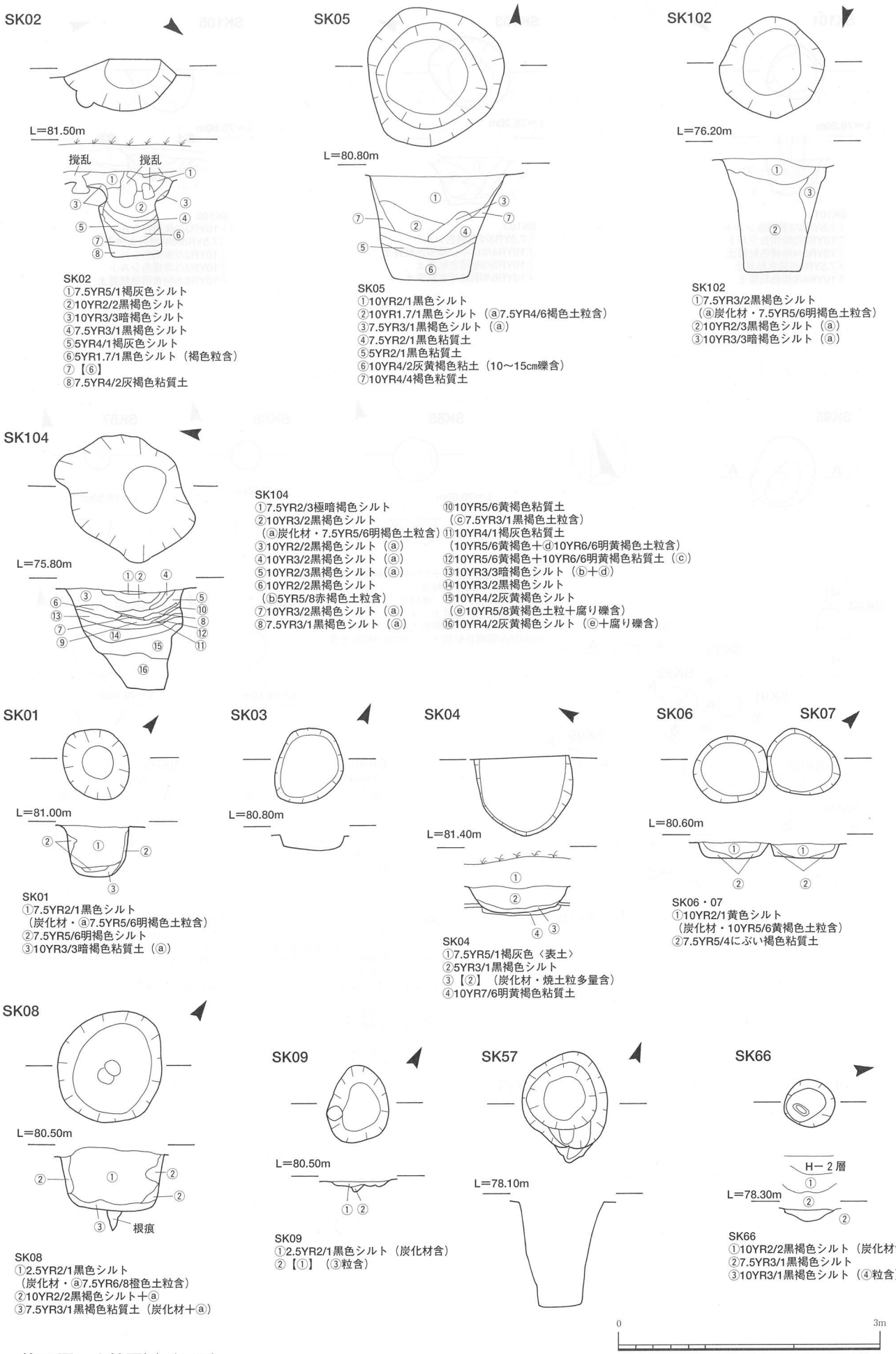


B−B′
①10YR3/2黒褐色シルト（2.5YR3/6暗赤褐色土粒含）
②7.5YR3/2黒褐色シルト
③【②】（ⓐ5YR4/8赤褐色土＋ⓑ7.5YR5/6明褐色土粒微量含）
④【②】（ⓐ＋ⓑ粒含）
⑤10YR3/3暗褐色シルト
⑥10YR3/4暗褐色シルト
⑦7.5YR4/3褐色シルト
⑧10YR4/3にぶい黄褐色シルト
⑨7.5YR3/2黒褐色シルト（ⓑ粒含）
⑩10YR3/3暗褐色シルト
⑪7.5YR3/2黒褐色シルト
⑫【⑩】（10YR5/6黄褐色土＋ⓑ＋ⓒ7.5YR2/1黒色土粒含）
⑬10YR5/6黄褐色粘質土（ⓒ粒含）
⑭【⑬】

0　3m

0　4m

第20図　SD01（平面図：1/80、断面図：1/60）



SK02
①7.5YR5/1褐灰色シルト
②10YR2/2黒褐色シルト
③10YR3/3暗褐色シルト
④7.5YR3/1黒褐色シルト
⑤5YR4/1褐灰色シルト
⑥5YR1.7/1黒色シルト（褐色粒含）
⑦【⑥】
⑧7.5YR4/2灰褐色粘質土

SK05
①10YR2/1黒色シルト
②10YR1.7/1黒色シルト（ⓐ7.5YR4/6褐色土粒含）
③7.5YR3/1黒褐色シルト（ⓐ）
④7.5YR2/1黒色粘質土
⑤5YR2/1黒色粘質土
⑥10YR4/2灰黄褐色粘土（10～15cm礫含）
⑦10YR4/4褐色粘質土

SK102
①7.5YR3/2黒褐色シルト
（ⓐ炭化材・7.5YR5/6明褐色土粒含）
②10YR2/3黒褐色シルト（ⓐ）
③10YR3/3暗褐色シルト（ⓐ）

SK104
①7.5YR2/3極暗褐色シルト
②10YR3/2黒褐色シルト
（ⓐ炭化材・7.5YR5/6明褐色土粒含）
③10YR2/2黒褐色シルト（ⓐ）
④10YR3/2黒褐色シルト（ⓐ）
⑤10YR2/3黒褐色シルト（ⓐ）
⑥10YR2/2黒褐色シルト
（ⓑ5YR5/8赤褐色土粒含）
⑦10YR3/2黒褐色シルト（ⓐ）
⑧7.5YR3/1黒褐色シルト（ⓐ）
⑩10YR5/6黄褐色粘質土
（ⓒ7.5YR3/1黒褐色土粒含）
⑪10YR4/1褐灰色粘質土
（10YR5/6黄褐色＋ⓓ10YR6/6明黄褐色土粒含）
⑫10YR5/6黄褐色＋10YR6/6明黄褐色粘質土（ⓒ）
⑬10YR3/3暗褐色シルト（ⓑ＋ⓓ）
⑭10YR3/2黒褐色シルト
⑮10YR4/2灰黄褐色シルト
（ⓔ10YR5/8黄褐色土粒＋腐り礫含）
⑯10YR4/2灰黄褐色シルト（ⓔ＋腐り礫含）

SK01
①7.5YR2/1黒色シルト
（炭化材・ⓐ7.5YR5/6明褐色土粒含）
②7.5YR5/6明褐色シルト
③10YR3/3暗褐色粘質土（ⓐ）

SK04
①7.5YR5/1褐灰色〈表土〉
②5YR3/1黒褐色シルト
③【②】（炭化材・焼土粒多量含）
④10YR7/6明黄褐色粘質土

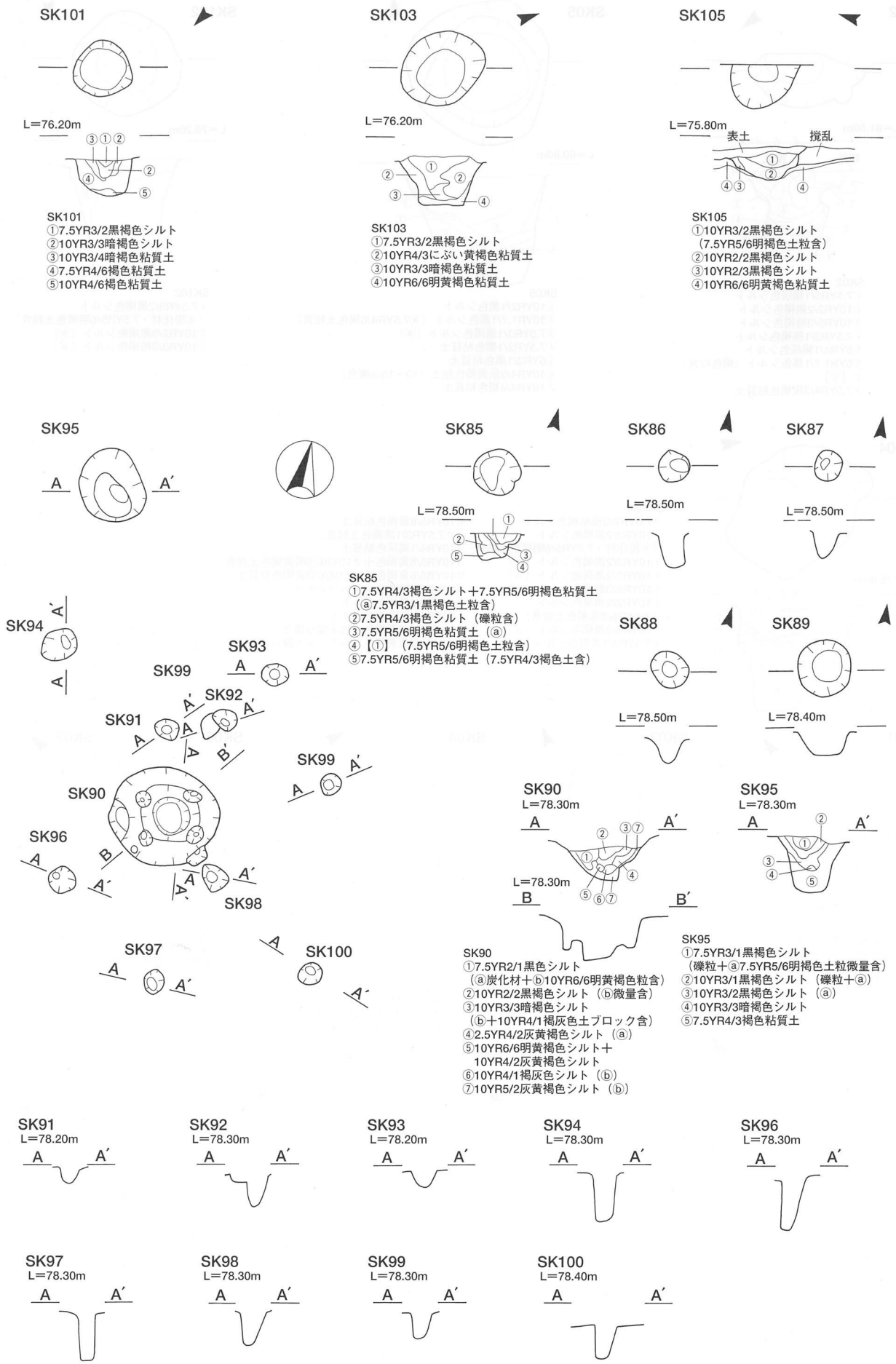
SK06・07
①10YR2/1黄色シルト
（炭化材・10YR5/6黄褐色土粒含）
②7.5YR5/4にぶい褐色粘質土

SK08
①2.5YR2/1黒色シルト
（炭化材・ⓐ7.5YR6/8橙色土粒含）
②10YR2/2黒褐色シルト＋ⓐ
③7.5YR3/1黒褐色粘質土（炭化材＋ⓐ）

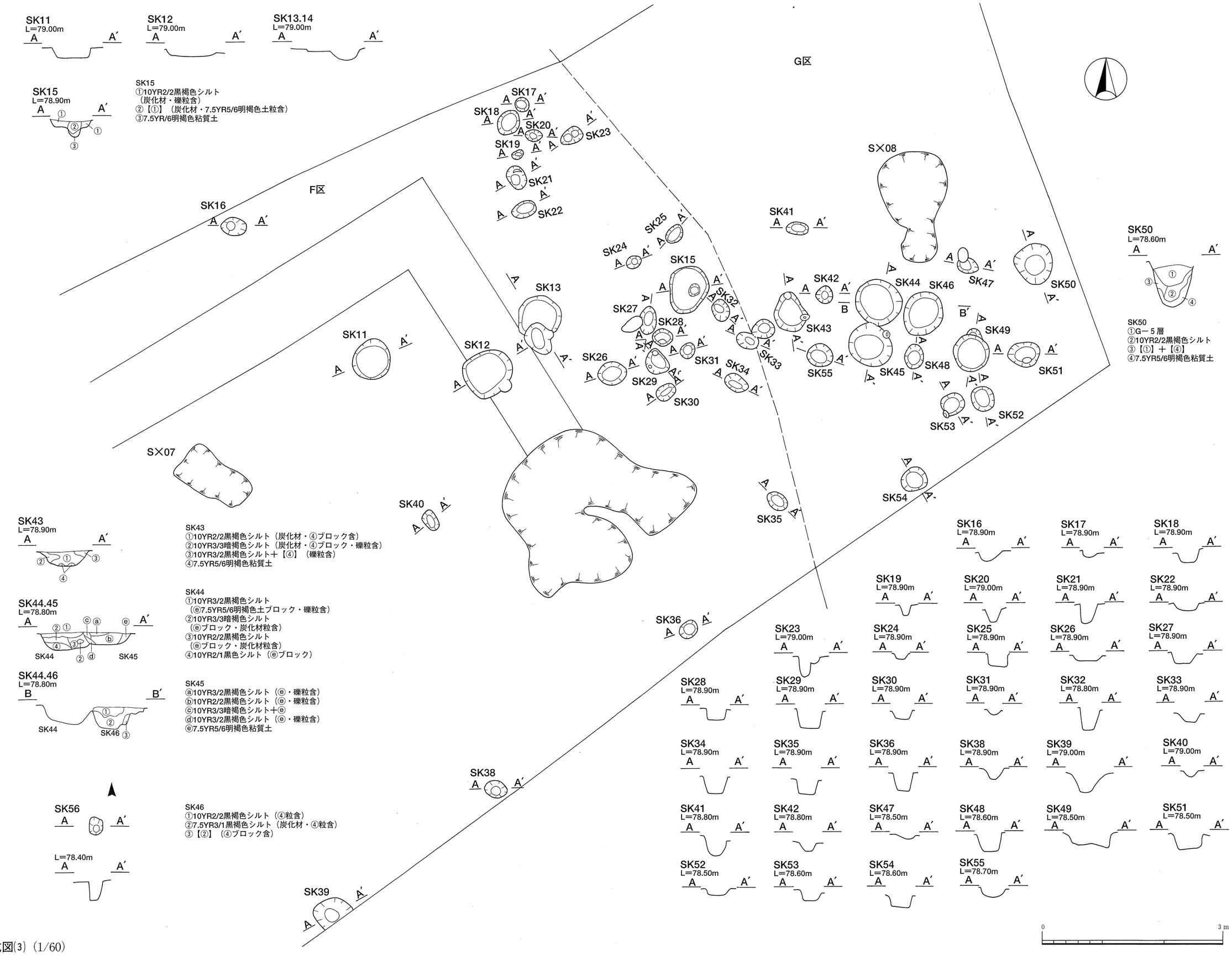
SK09
①2.5YR2/1黒色シルト（炭化材含）
②【①】（③粒含）

SK66
①10YR2/2黒褐色シルト（炭化材含）
②7.5YR3/1黒褐色シルト
③10YR3/1黒褐色シルト（④粒含）

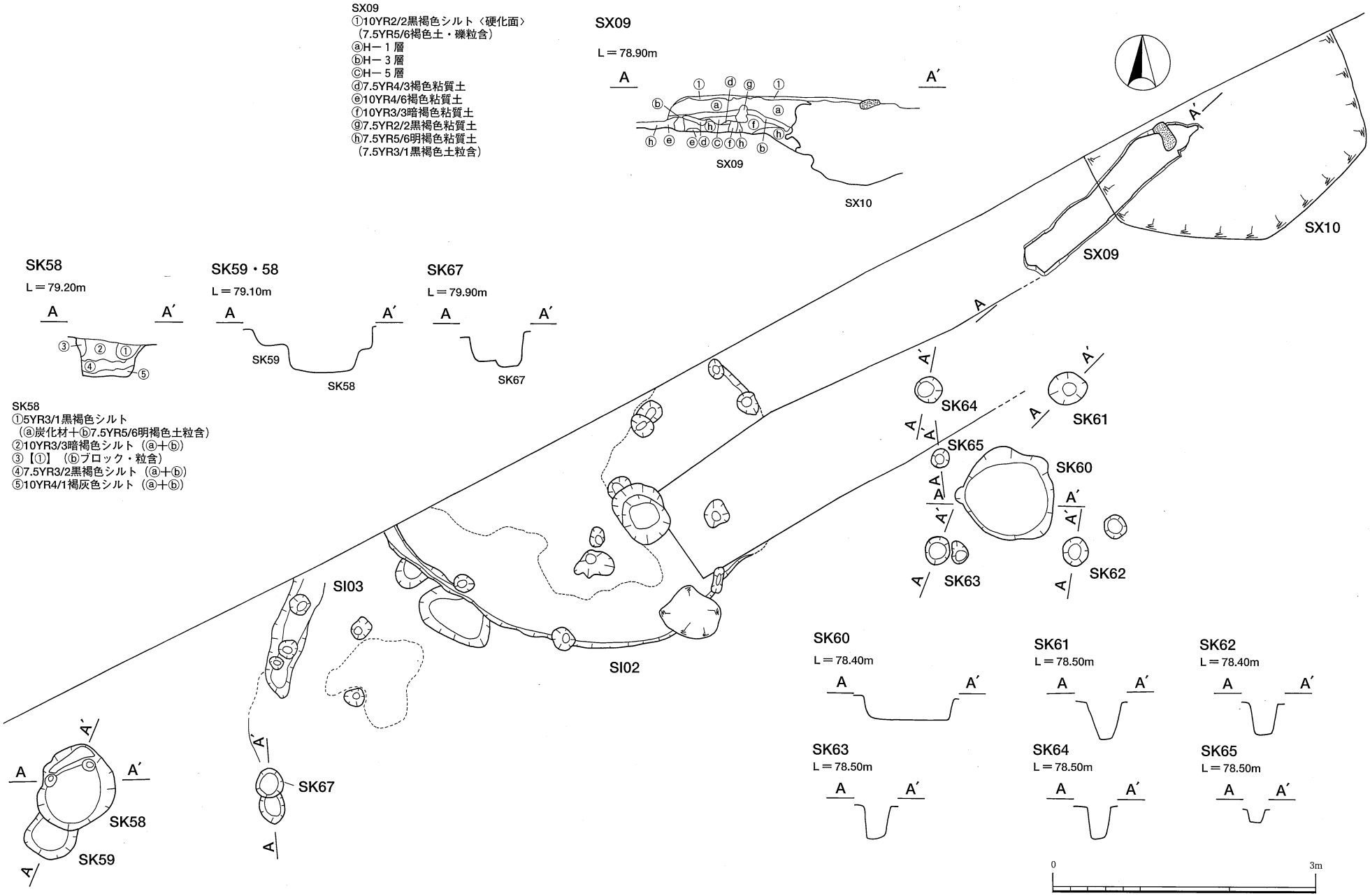
第21図　土坑図(1)（1/60）



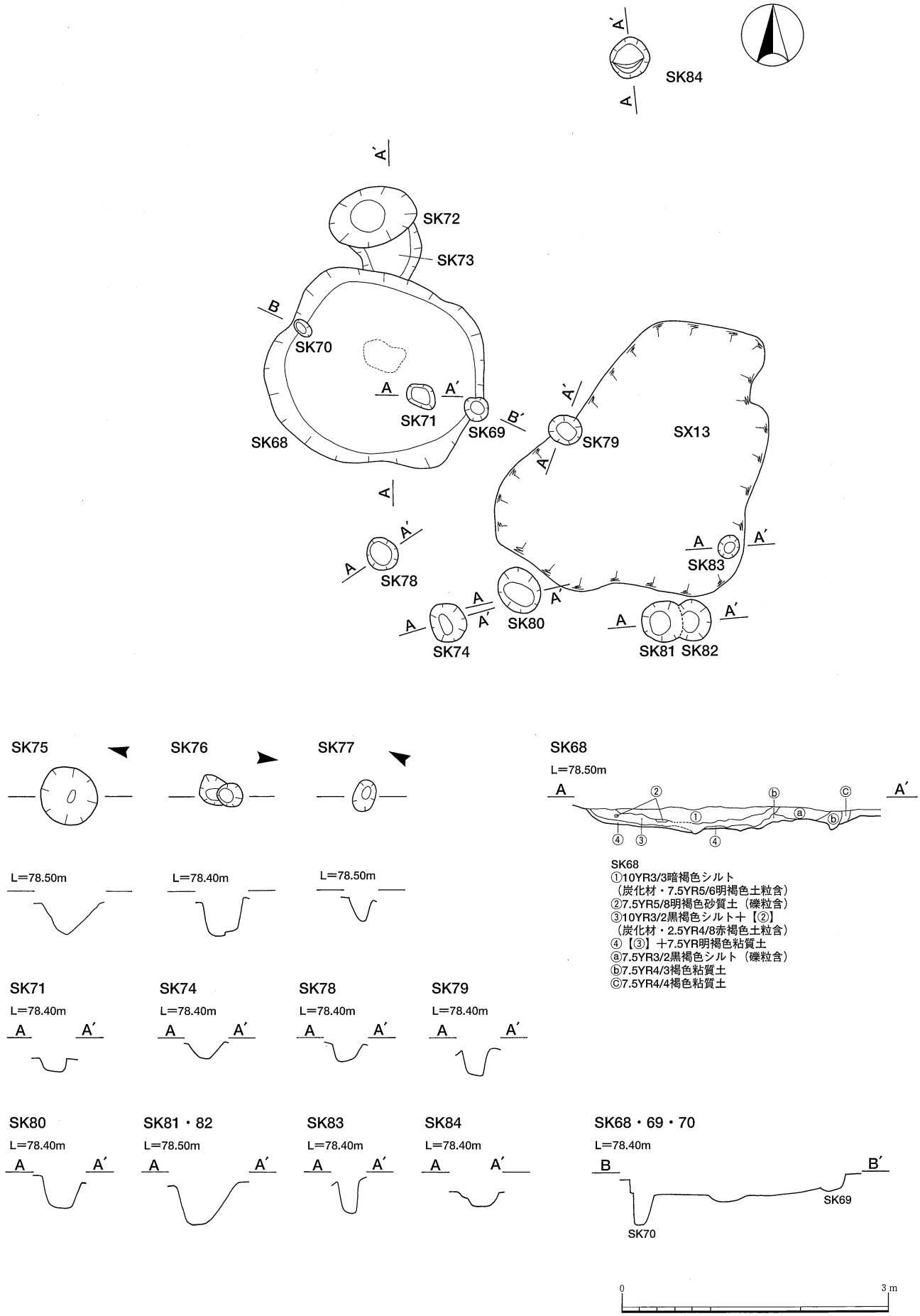
第22図　土坑図(2)（1/60）



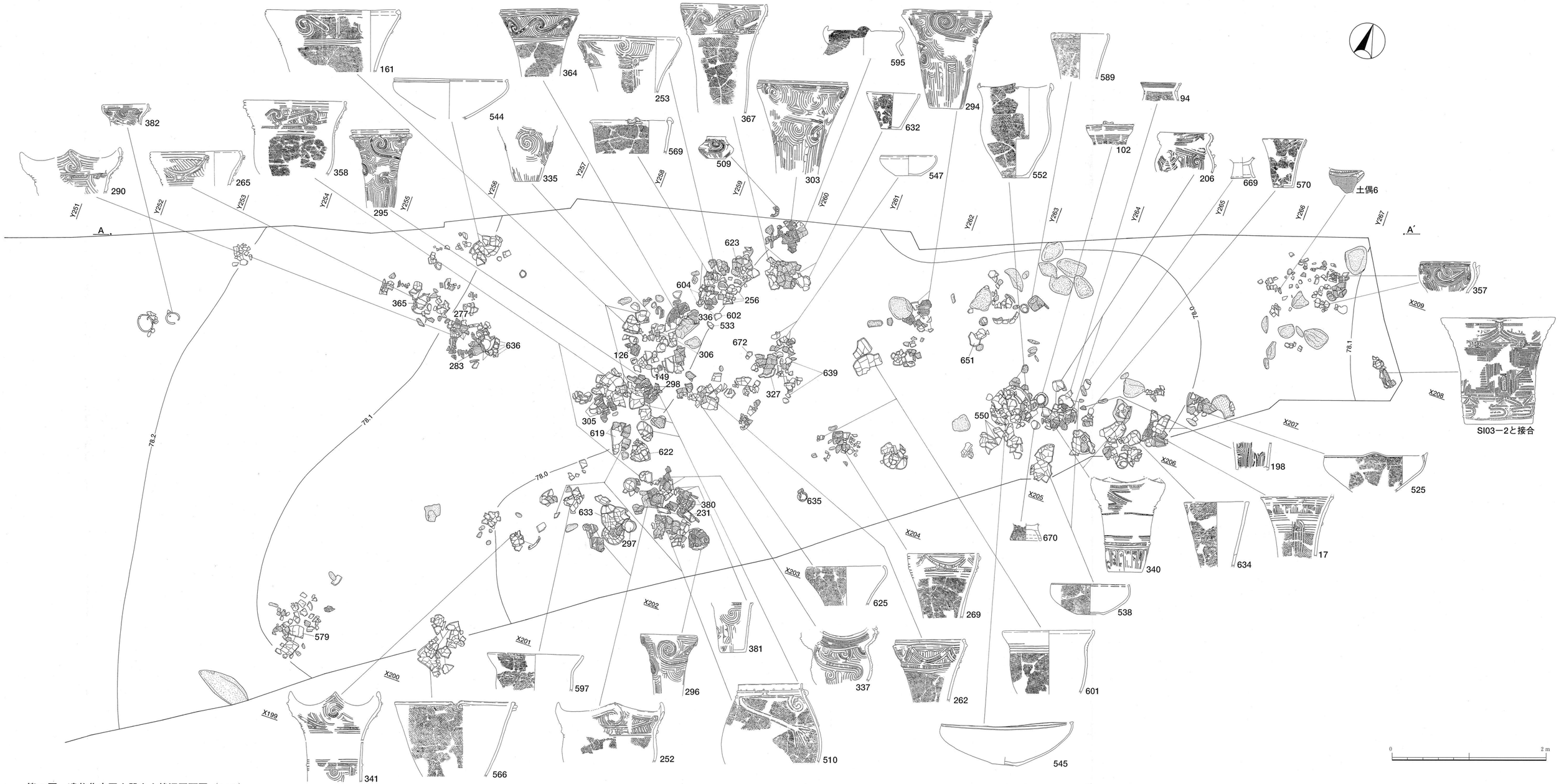
第23図　土坑図(3)（1/60）



第24図　土坑図(4)（1/60）



第25図　土坑図(5)（1/60）



第26図　遺物集中区土器出土状況平面図（1/40）

第27図　遺物集中区土器出土状況断面図及び北壁土層図（1/40）